

なてしこの、こたかききしの、ふしの花、かすみのうちの、かわさくら、たによりいつる、うくひすの、はかせになひく、あほやきの、ませのうちなる、しらきくの、うつろふほとん、やまふきの、さかりのつゆのこほれたる、ゆふへに、おもひいつるといひしものを、花たちはなに、よそへても、むかしおほゆるかたちそと、さすか、人めは、見るめとよ (297D 常磐の姥・室町奈良絵本)

この人と申は、むめがかを、さくらの花ににほはせて。やなぎがえだに、さかせても。はるのすぎん事をのみ、見る人。をしまでやあるべき。(284F 鶴の草子・寛文2刊本)

- 43) 384A 窓の教・江戸後期写本/316G 花子ものぐるひ・寛文延宝頃刊本/311A 鉢かづき・江戸初期写本/312A 鉢かづきの草子・寛永頃刊本
- 44) 日本古典文学大系『源氏物語三』(山岸徳平校注) 補注 425
- 45) 209C「浄瑠璃御前物語」(慶長頃写本) や 343F「ふくろふのそうし」(明暦4写本) に全く同じ表現が見られる。
- 46) 室木弥太郎校注『説経集』(新潮日本古典集成)
- 47) 「露をもげなる」は一部「つゆおもかけなる」(063/209) という表記あり。「おみなべし」(008)「おみなめし」(099/190/209/246/297/311) の表記もあり。
- 48) 『能因歌枕』に「をみなへし、をんなにたとへてよむべし」とある。
- 49) 武山隆昭編『住吉物語(契沖本) 校本と文節索引』(平7. 椋山女学園文学部国文学科共同研究室)  
辛島正雄校訂・訳注『小夜衣』(中世王朝物語全集9・笠間書院)
- 50) 「月」は特に限定のない場合が多いが、姿や顔の場合は満月を想定していると思う。「有明の月」(54A うたたねの草子・近世写本/128B 賢学草子・室町絵巻/209C 浄瑠璃御前物語・慶長頃写本)、「弓張月」(193C しみづ物語・寛永写本/265G 短冊の縁・江戸中期写本/269A 中将姫本地・慶安4刊本/343F ふくろふのそうし・明暦4写本) は目元や眉の形容。
- 51) 高知大学国語史研究会編『栄花物語 本文と索引 自立語索引編』『同・本文編』(昭60・61)
- 52) 池田利夫編『唐物語 校本及び総索引』(笠間索引叢書48)
- 53) 覚一本『平家』にも「山のはいつる月のごとし」(九「老馬」) とあるが、これは平家軍が火をたいている様子の比喻で、美人描写ではない。

87 (50) 花鳥風月を以てする美人描写

号・昭44・3)

- 15) 「花にねたまれ」の類は「ねたまれるほど美しい」と解してここにいった。
- 16) 但し、「花のごとくなるかたち」は見える。
- 17) 注(8)前掲書で、今西浩子氏は、服飾用語についても類型的に用いた例が多いと指摘された上で、次のように述べておられる。「しかし、類型表現がすなわち陳腐な表現かということになると、首をかしげざるをえない。類型的でありながら、末端で少しずつ変えていく、いうならばバリエーションのおもしろ味を感じさせる類型表現がお伽草子には多いのである」(VI「お伽草子の語彙」)
- 18) 内田泉之助校注『白氏文集』(中国古典新書・明德出版社)
- 19) 北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語・本文篇』及び『同・索引篇』(勉誠社・平成2)
- 20) 渥美かをる編『源平盛衰記・慶長古活字版』(古典資料類従)
- 21) 日本古典文学大系『源氏物語』(岩波書店)
- 22) 萩谷朴校注『松浦宮物語』(角川文庫)
- 23) 日本古典文学大系『曾我物語』(岩波書店)
- 24) 西端幸雄・志甫由紀恵『土井本太平記 本文及び語彙索引』(勉誠社)
- 25) 石田瑞麿解説『源信』(日本思想大系・岩波書店)所収
- 26) 「蓮を含める唇」の形が他に見える。
- 27) 大曾根章介・堀内秀晃校注『和漢朗詠集』(新潮日本古典集成)
- 28) 小林芳規編『法華百座聞書抄』(昭51・武蔵野書院)
- 29) 日本古典文学大系『平家物語』(岩波書店)
- 30) 岡山大学池田家文庫等刊行会編『岡山大学平家物語二十卷(1)～(5)』(昭50-52・福武書店)
- 31) 『和漢朗詠集』自体は『白氏文集』巻四「井底銀瓶を引く」による。
- 32) 鈴木一彦他編『海道記総索引』(昭51・武蔵野書院)
- 33) 日本古典文学大系『謡曲集』上下(岩波書店)
- 34) 新日本古典文学大系『舞の本』(岩波書店)
- 35) 「花子ものぐるひ」(316)のもうひとつの例も同様
- 36) なお、ほぼ同文が御伽草子の「さよごろも付えんや物語」(176)にある。また「しのばずが池物語」(190)も「月をねたむ」の形である。
- 37) 「児物語部類」にある。注(2)前掲書・397ペ
- 38) 054A うたたねの草子・近世写本/169D 酒の泉・近世絵巻/316G 花子ものぐるひ・寛文延宝刊本/355D 文正草子・寛永前後奈良絵本/360C 平家花揃・江戸中期写本/361C 同・貞享3写本
- 39) 172A さごろも・寛永頃丹緑本/225F 墨染桜・承応2写本/395C 村松物語・寛文元禄奈良絵本/401B 文殊姫・近世奈良絵本
- 40) 注(5)前掲書
- 41) 49A いわや物語・慶長13写本/265G 短冊の縁・江戸中期写本/297D 常磐の姥・室町奈良絵本/360C 平家花揃・江戸中期写本/361C 同・貞享3刊本/364B 弁の草子・元禄8写本
- 42) たとえば次がそれにあたる。  
    にようごの君の、御すがたを。藤の花にたとへたり (316G 花子ものぐるひ・寛文延宝刊本)  
    あかしのうへは、五月まつ。はな立ちばなに、たとへたり (316 同右)  
    うはかさかりの、かたちをは、あらしになひく、おみなめし、つゆにしほるる、

果、特に作品（伝本）の多い公家・僧侶・武家小説に関していえば、「光る・輝く・玉」「花鳥風月」を嗜好する公家小説、「光る・輝く・玉」を嗜好する僧侶小説、「美人例示」「花鳥風月」そして「光る・輝く・玉」のうち「玉」を嗜好する武家小説ということになるだろうか。これらの結果は各分類の内容と十分関連するといつてよい。

しかし、同じ分類のみならず、同じ作品でも表現方法や表現形式あるいは類型表現の取り入れ方などが異なることがある。また、決まり文句の使用などは分類や作品よりも伝本の年代と関わりがありそうである。表現からの視点で、御伽草子の分類を改めて見直す必要を感じる。

### 注

- 1) 「御伽草子の美人描写——古来の美人にたとえる表現」（『調布日本文化』7号・平9・3）・「御伽草子の美人描写(2)——「光る」「輝く」「玉」をめぐって」（『調布日本文化』8号・平10・3）。本稿で述べる「美人例示」及び「光る・輝く・玉」に関する記述はすべてこれらによるものである。
- 2) 『中世小説の研究』東大出版会（昭30・12）
- 3) 「調布日本文化」7号参照。「美人例示」とは、「姿は楊貴妃のごとし」のように美人を古来の美人にたとえる方法をいう。但し、女性に限定してしまったので、本稿では「光源氏のごとし」のような男性を対象にした例も加えてみた結果、「美人例示」は70作品に見えることがわかった。なお、これによって7号の趣旨が変わることはない。
- 4) 「調布日本文化」8号参照
- 5) 『平安文学の文体の研究』（明治書院・昭59・2）
- 6) 市古貞次氏が注(2)前掲書に示された「公家小説」「僧侶小説」「武家小説」「庶民小説」「異国小説」「異類小説」による。また、どこにも入れがたいものは「その他」とした。なお、418伝本の各本がどの部類に入るかは筆者が認定したが、今回改めて見直した結果、以前の稿と相互の分類に多少入れ替わりが生じた。但し、その結果以前の稿の論旨が変わるということはない。
- 7) 花鳥風月を以てする表現のうち、特に直喩の場合は比喩の目印になることば（ごとし・に異ならず・より～・とあやまつ・の心地など）を除いた文節数を表す。
- 8) 今西浩子氏は日本古典文学大系本（岩波書店）所収の二十八作品について、花鳥風月を表す語彙について調査された。その中で、特に「花」について検討された結果「お伽草子においても、「花」といえば、まず桜であったと考えることが出来る」と述べておられる。（『お伽草子の言語』平4・和泉書院）
- 9) 注(5)前掲書「第二部第二章 源氏物語の比喩表現」
- 10) 異本関係にある075「扇合物語」（室町末写本）もほぼ同様の表現
- 11) 異本関係にある207「精進魚類物語」（近世中期写本）もほぼ同文
- 12) その他、花鳥風月の表現ではないが、「みどりのかんざし」や「立板に水を流す」等の固定的表現が多い。
- 13) その他、花鳥風月ではないが、「青黛のまゆずみ」等の決まり文句が多い。
- 14) 「直喩形式をあらわす言語形式と対比関係とに関する一考察」（『表現研究』9

## 89 (48) 花鳥風月を以てする美人描写

かたちを。みれは。秋の月。十はらとうのゆひまでも。るりを。のへたる。ことく  
なり。(324)

かやうに、みめかたちの、うつくしきひめも、有けるやな、すかたを申せは、春  
の花、かたちを申さは、秋の月、しつはら十のゆひまでも。るりをのへたることく  
也(325)

御伽草子と説経の関係を裏付ける用例である。

## 八 終わりに

以上、前半は形態から、後半は内容から、花鳥風月を以てする表現について考察してきた。

美人を花鳥風月を以てする表現方法は、古来の美人にたとえる表現方法や「光る」「輝く」「玉」を以てする表現方法と比較すると、広義の御伽草子の中では最も一般的な表現方法であった。その長さは短く、ほとんどが四文節以下であり、たとえる素材も言葉の結び付け方も類型的な傾向が強い。特に、対象が髪・目・唇など部分になると、決まり文句を使用する傾向がきわめて強い。表現形式は隠喩が多く、直喩は「～ごとし」「～よりうつくしく」「～のこち」のような表現が多い。

よく使われる表現として「柳の風に靡く」パターンや「翡翠のかんざし」「をみなえしの露おもげなる」が特にあげられるが、これらは、たおやかな姿と黒く長くつややかな髪という、御伽草子の時代の女性に対する嗜好が表れている。また、代表的な表現を検討すると、それぞれの表現は先行の作品にすでに見えるものであるが、その伝統にあまり左右されずに、表現の一部をとりあげたり、意味を単純化したり、前後の表現を少しずつ変えることが御伽草子の特色である。特に読者層との関わりがあると思われる。

ところで、代表的な表現は『舞の本』と共通することが多いことは「美人例示」等の場合と同様であるが、「花鳥風月の類」に限っていえば『義経記』『曾我物語』『太平記』よりも『平家物語』の読み本系の諸本と共通することが多い。御伽草子の性格の一面を考えていく上で示唆するものがあるだろうか。決まり文句の成立に関して、漢籍・仏典の検討を要する課題と共に今後の検討課題である。

さて、本稿の目的の一つとして分類との関わりを探ることがあったが、最後にこの点についてふれておく。

市古氏のあげられた御伽草子の三類の美人描写についてすべて検討した結

## (14) 「姿を申せば春の花, 形を申せば秋の月」型

以下の伝本に見られる。古写本や寛永ころまでの伝本が目立つ。

040B 巖島の本地・室町末写本/128B 賢学草子・室町絵巻/144D こをとこのさうし・室町奈良絵本/193C しみづ物語・寛永写本/209C 浄瑠璃御前物語・慶長頃写本/209同/274B 月日の御本地・寛永正保丹緑本/275B つきみつのさうし・近世丹緑本/311A 鉢かづき・江戸初期写本/324F はまぐりはたおり姫・明暦2刊本/325C はもち・近世奈良絵本/326C はもち中納言・近世写本/356D 文正の草子・寛永頃丹緑本/358D ぶんしやう・慶長元和奈良絵本/395C 村松物語・寛文元禄奈良絵本/397D 物くさ太郎・寛永頃刊本/400C もろかど物語・寛永6写本

「姿を申せば春の花, 形を申せば秋の月」(209/209/311/325/326), 「姿を見れば春の花, 形を見れば秋の月」(040/144/193/274/275/324/358/400), 「姿は春の花, 形は秋の月」(128/356/395/397) が基本型であるが, 「花」と「月」が入れ替わったり, どちらかが省略されたり, それぞれが少しずつ異なっている。

ゆゆしき人と, うちみへて, まなこさし, けたかく, すかたを申せば, はるのはな, かたちを申せば, あきのつき, 十はらとをの, ゆひまでも, るりをのへたか事ならず (209)

后たちゆき給ひ, さて見給ふに, まことに, あたりもかかやく, ばかりなり, 御すかたをみれば, 秋の月, かたちをみれば, はるの花, 何にたとゑん, かたもなし (040)

すかたは春の花, かたちは秋の月, 三十二さう, あきみちて, ももあひきやうそろひ, ひすひのかんさし, りうはつ, かせにみたれ, かつらのまゆの, にほひは, ありあけの月の, ほのほのと, くもまにのこる, ことくなり (128)

(14) は「舞の本」や「説経」に見られる表現である。

さる間, 阿古王御前, 形を見れば春の花, 姿を見れば秋の月, 眉目も形も並びなき, 洛中一番の美人とは申せども (景清)

この照手の姫の, さて姿形の尋常さよ。 姿を申さば春の花. 形を見れば秋の月. 十波羅十の指までも, 瑠璃を延べたる如くなり (をぐり)

「をぐり」の例は, 後続する表現まで全くおなじ例が御伽草子にも見られる。

すかたを申せば, はるのはな, かたちを, 見れば, あきのつき, 十はらとをの, ゆひまでも, るりをのへたる, ことく成 (206)

かほと。いつくしき。にうはう, 世にたくひなし。 すかたを。みれば。春の花。

91 (46) 花鳥風月を以てする美人描写

其姿、十五夜の月の、山のはを出るがごとく、梅、さくら、柳、折りぐしたりし、其ふぜい、三十二さう、八十しゆごうそなはりたる美人也(085)

御かたちは、秋の月の、山の葉をいつるにことならず(269)

今年、十六に成給ふ、かたちは、つほめる花、山のはいつる月の、さまし給へる、御くしを、なくなくそりおとして、墨の衣に。やつしるも、夢のやうなり(382)

以上のほかに、山の端と月に関連したものが2例ある。

たんくわのくちびる、あざやかにして。せいたひのまゆずみ、ほのほのと、山のはちかき、三日月の。ひかりかかやくすがたにて。にほひもふかき、はつ春の、はつねの、けふの、たまさかに。さきそめにたる花よりも、なをめつらか也(A107 衣更着物語・貞享5刊本)

十はらとをのゆひはた、るりをのへたるかことし、まことに、あきの月の、山のはにほのめき、はるのはなの、へんさんにかすむも、よそならずおほへ給ふ(F217 雀さうし・近世前期写本)

さて、(13)の出典に関しては不明だが、『栄花物語』<sup>51)</sup>に次のようにある。

かくてわかみやの いと物あさやかにめてたう やまのはよりさしいてたるもち月などのやうにおはしますを そち殿のわたりには むねつふれ いみしうおほえ給て(巻八・はつはな)

成立年未詳であるが『栄花物語』と同時期かとも言われる『唐物語』<sup>52)</sup>にも

みやこのほかまでたつねもとめさせ給に楊家のむすめをえ給てけり。そのかたち秋月の山のはよりたかくのほる心地して、そのいきさしは夏のいけにくれなるのはちすはしめてひらけるにやとみゆ(第十八話)

とある。

さらに、鎌倉期の物語や『平家』の延慶本や『曾我物語』にも見える<sup>53)</sup>。

人々、のぞきて見奉るに、はなやかにさし出たる夕月夜に、うちふるまひ給へるけはひに、似るものなくめでたし。山の端より月の光かかやき出たるやうなる御有様、目もおよばず。(小夜衣)

花の顔ばせ、譬む方なく、望月の山の端より出る心地して、うつくしかりし御有様を空く見奉りて(延慶本平家・第六末72ウ)

山の端を出る月影を、心ぐるしく待ゑても、見し面影にはことなれば、是ぞ、なぐさみたまふ事あらじ(曾我物語)

なお、以上の例は『唐物語』を除いて、対象はすべて男性である。御伽草子の場合はむしろ女性がほとんどである。

一方、鎌倉時代の物語<sup>49)</sup>になると、例が見えてくる。

母君の御事とも 折々歎き給ひし御姿 いへはおろかにこそ 女郎花の露おも  
けにて 籬のほとにたふれふしたる心ちして 其こととなく哀にいとほしくよそ  
の袂までも所せき程に (住吉物語・契沖本十)

一日よりは尼上の心地も悩みまさり給へば、姫君はかたはらに、おなじさまに  
て添ひ臥し給へり。まことに女郎花の露重げなる御気色にて、埋もれ臥し給へる  
うつくしきは、笙の岩屋の聖なりとも、心移りぬべし (小夜衣)

また、『平家物語』の延慶本にも次のようにあり。

女房余の事にてつゆ其の返事もなし。「いかにいかに」とせむれども、おみなへ  
しのつゆ重げなるけしきにて、とかふの詞もなし。(第二末 11ウ)

以上の例に共通するのは、美人がうちしおれている様子を形容しているとい  
うことである。御伽草子にも同様例がある。

おもわせけなる、かほはせは、さかのほらなる、おみなへし、露をもはゆけな  
る、ふせいにて (030 あやめのまへ・慶長頃小型絵巻)

ただし、上のような例は御伽草子では少ない。「うちしおれている」状況と  
は関係なく単に美人の描写として用いられている。本来は「美人がうちしお  
れている様子」をいう表現が、御伽草子の時代に意味の一部をそぎ落とし単  
純化したということであろう。

### (13) 山の端を出る月

御伽草子の「月」は「花」との対句で用いられることが多く、「月」のみを  
対象にした類型的表現は少ない。「山の端」と結びつけた「月」が 12 例、「雲」  
と結びつけた「月」が 10 例見られるが、前者の方が表現の上で類型的なの  
で、とりあげることにする。12 例のうち 10 例までが「山の端を出る月」の類  
型句である<sup>50)</sup>。

以下の伝本に見える。

C085 御曹司島わたり・寛文絵巻/B121 熊野の本地・寛文元禄絵巻/A182 志賀物  
語・寛文頃奈良絵本/B196 釈迦の本地・寛永 20 刊本/A197 十二人姫・寛文 10  
刊本/A268 中将姫・慶長前後絵巻/A269 中将姫本地・慶安 4 刊本/D358 ぶんし  
やう・慶長元和奈良絵本/B382 松帆物語・正保慶安頃刊本/A417 わかくさ・寛  
文頃写本 (うち、十五夜・満月と限定しているのは、085/182/196)

姿を形容するのが普通であるが、時に顔、また髪の例も見える。

93 (44) 花鳥風月を以てする美人描写

(8/26/246/356 等)「籬の外に倒れ出る」(227/318/375 等)などが加わる<sup>47)</sup>。また、「露を置く」「露を含む」という場合(99/270/360/361)も見える。公家小説に多い。

A008 秋月物語・江戸初期写本/B026 あみだの本地・天文 21 写本/C030 あやめのまへ・慶長頃小型絵巻/D063 瓜子姫物語・近世初期絵巻/A075 花鳥風月・室町写本/A092 同・文禄 4 奈良絵本/A093 同・慶長元和古活字本/A099 唐崎物語・寛文頃写本/A107 衣更着物語・貞享 5 刊本/A153 小町のさうし・寛永頃奈良絵本/A168 さくらの中將・寛文 10 刊本/A185 しぐれ・寛永頃奈良絵本/A197 十二人姫・寛文 10 刊本/C209 浄瑠璃御前物語・慶長頃写本/A227 住吉物語・古活字本/B246 滝口物語・江戸初期写本/G265 短冊の縁・江戸中期写本/C270 中書王物語・江戸前期写本/A311 鉢かづき・江戸初期写本/B318 花の縁物語・寛文 6 刊本/A335 一本菊・万治 3 刊本/D355 文正草子・寛永前後奈良絵本/D356 文正草子・寛永頃奈良絵本/C360 平家花揃・江戸中期写本/C361 同・貞享 3 刊本/C375 堀江物語・寛文 7 刊本

さしもこそ、花のすかたの、袖かさね。にほひもふかき。むめころも。たちすかたは、をみなへしの。露をもけなる心ちして(153)

おもわせけなる、かほはせは、さかのはらなる、おみなへし、露をもはゆけなる、ふせいにて(030)

御すかたを、ものにたとふれば、あきのはらの、をみなへし、つゆをもけなるおんすかた、まことに、ならふ人あらしとそ、おほゆる(026)

御かほのにほひ、ほけやかに。あいきやうまじりの御姿は。楊柳の風に、なびくがごとし。秋ののをみなへし。露おもげにて、まがきの外まで。たをれ出たる風情也(375)

いととみめかたち、うつくしくて、のへに、さきみたれるをみなへしの、つゆおもかけなる、心ちして(063)

こほれかかる、ひんのはつれより、にほひやかなる、かうはせは、露をふくめる、をみなへしの、風まちかほなるは、なを、事、かきりあり(270)

うつくしさ、さかの秋の、をみなへし、露をきわひたるよりも、こころくるしく(360)

「をみなへし露おもげなる」の出典は平安和文を予想したが、そうではなさそう。歌で女性の姿を「をみなへし」にたとえることは古来多く見られ<sup>48)</sup>、『源氏物語』にも見えるのだが、「をみなへし露おもげなる」の元になるような表現は『源氏物語』にはない。また、『夜の寝覚』や『狭衣物語』『堤中納言物語』等の物語にも見えない。



ところで、「柳」パターンは『平家物語』等にも見える。延慶本には見えないが、覚一本や長門本に次のようにある。

桃顔露にほころび、紅粉眼に媚をなし、柳髪風にみたるよそほひ、又人あるべしとも見え給はず。(覚一本七・維盛出家)

りうはつ風にけつれるよそほひ、やうきひ、りふしんもかくやとそおほえたるに(長門本十・渡左衛門妻子事)

『太平記』や「謡曲」にも次のようにある。

ちやうていの、やなきの風に、しなへるも、まくらにかゝりしねみたれかみの(太平記三十七・楊国忠が事)

翡翠の釵は婀娜とたをやかにして。楊柳の春の風に靡くが如し。(卒塔婆小町)

桃李雨を帯び、柳髪たをやかなり(鸚鵡小町)

これらは、みな「髪」の形容であるが、御伽草子の場合は「髪」のみならず「姿」の形容としても用いられる。

「舞の本」で容姿を柳にたとえている表現が4例見えるが「柳・風・靡く」のパターンでは、やはり髪形容である。

籬の菊の露を含み、楊柳の枝よはく、西施が装ひもかくやと思ひ知られたり。(小袖曾我)

思ひの色も青柳の、いと恥ずかしげなる御有様は、露に萎るる花かとや。(築島)

大方、姿尋常にして、楊柳よりも、たをやかなり。(満仲)

翡翠のかんざしは、黒ふして長ければ、柳の糸を春風の梳る風情に異ならず。(大織冠)<sup>45)</sup>

説経の「をぐり」<sup>46)</sup>に姿を形容した「柳の風になびく」パターンが見える。ただし、「ふける」という言い方は「あきみち」(016)にも見えるが、御伽草子では極めて例外的な言い方である。

中には楊柳の風にふけたるやうな姫の一人、涙ぐみておはします。(をぐり)

あのような楊柳の、さて風にふけたるやうな姫(をぐり)

## (12) 女郎花・露おもげなる

姿または顔を「をみなへし」にたとえるものは32例見えるが、27例が「をみなえし」と「露」のパターン、3例が「風」に「なびく」パターン、2例は「花づくし」の一部である。すなわち、「をみなへし」と「露」を組み合わせたパターンが大半を占め、そのほとんどが「をみなへし、露おもげなる」で、これに「嵯峨野の原」(30/75/92/63/107/168/185/209/265等)や「秋の野」

これを元にした表現が『夜の寝覚』にも見られる。

よくさきこぼれたる八重桜の、朝露にしほれたるを霞の間より見わたす心地するを (巻四)

御伽草子にもこの影響と思われる表現はある<sup>41)</sup>。

もやのみすのまへわは、きはめてしつかに、さすかにおそからず、あよみたまふ、御すかたは、きさらぎなかはの、あひきやうは、やよひなかはの、かはさくらの、あけほのに、くまなき月の、このまより、さしいてたるに、ことならず (49A いわや物語・慶長13写本)

しかし、この影響は「柳」パターンに比べてはるかに小さいのである。他にも『源氏』の比喩の影響が見られる個所はあるが「柳」パターンとは比べものにならないほど少ない<sup>42)</sup>。

従って、花鳥風月の表現に限っていえば、『源氏物語』の表現の影響は全体に幅広く渡っているわけではない。女三宮をたどえた「柳」にのみ集中しており、『源氏』の重要人物である紫の上や明石上、藤壺女御などをたどえた、桜・花橘・山吹などはあまり採用されないのである。これは、個性を描き分ける紫式部の方法を全く失っている一方で、(12)の「をみなえし」と考え合わせると、御伽草子の時代に女性の美として「たおやかさ」を主眼におく傾向があることを意味すると思われる。これは、御伽草子において、美人を古来の美人にたとえる方法で、紫の上や明石上よりも女三宮にたとえられることが多かった点とも関連するのではあるまいか。ちなみに、平安後期物語や鎌倉期の物語には特にこのような傾向は見られない。

なお、御伽草子の「柳」パターンで常に『源氏』を意識していたかという点については疑問がある。たとえば、先の女三宮の描写の中で、山口氏が指摘されるように、「きさらぎなかば」の青柳であることが紫式部の美意識なのであろうが、御伽草子の中で「春」や「春風」と限定している例も見られるが、「きさらぎなかば」と限定しているものは極めて少ない<sup>43)</sup>。

表現自体が一人歩きをして、原典から離れてしまっていると考えてよいであろう。そして、御伽草子の「柳」パターンに見られる言葉の使い方からみて、『源氏』の表現の下敷きになったといわれる<sup>44)</sup>『白氏文集』の次の「楊柳枝詞」の影響も直接ではないにしろ、あるように思われる。

依依嫋嫋復青青 (依依嫋嫋また青青)

勾引春風無限情 (勾引す春風無限の情)

が、①の表現方法は、もとは『源氏物語』の表現によるものであると思われる。

すなわち、女三宮を柳にたとえた次の表現である。

にほひやかなる方は後れて、ただいとあてやかにをかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらん心地して（若菜下）

『源氏物語』には、上のような登場人物に応じた植物の比喩がいくつか見えるが、

山口仲美氏によれば、植物のイメージを以て登場人物をかき分ける方法は『源氏物語』以前にはなく、作者・紫式部が見出した方法であるという<sup>40)</sup>。

そして、これらの比喩（氏がとりあげているのは特に「直喩」）について次のように述べておられる。

「いずれも、容姿容貌をも含めた人柄全体に対する直喩であり、源氏物語におけるそれぞれの人物の占める位置をも暗示し得ている。このような直喩は、瞬間的・直感的な連想によって生ずるものではなく、あらゆることを計算して、入念に作りあげたものと言えよう。」

このような直喩は、『源氏物語』以後の物語にも多大な影響を与え、そこでは『源氏』の表現を下敷きにした表現が用いられている。ただし、その取り入れられ方は、紫式部の入念な方法とは異なることを、山口氏は指摘されている。「これらの物語にみられる直喩は、源氏物語のそれに、きわめて似ているにもかかわらず、イメージの凝縮性という点で劣っている。そして、何よりも、源氏物語にあっては、これらの直喩が、人物の描き分けの表現の方法であることを、寝覚・浜松では、別人であるにもかかわらず、違いはとらえられずに、同じような直喩で形容されている。源氏においては、直喩の果している役割まで見通すことはなかったのである。単なる文章の飾りとして認識したのである。」

御伽草子に至っては、『源氏』以降の物語の傾向がさらなるものになっているとあってよい。すなわち、個性をかき分けるといった意識は全くなく、美人を描写する「単なる文章の飾り」であり、しかも『源氏』でいくつもかき分けられていた比喩のうちの一つ、「柳」のパターンに集中するのである。

たとえば、次は『源氏』で紫上を植物のイメージでたとえた比喩である。

見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高きよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたる心地す（野分）

97 (40) 花鳥風月を以てする美人描写

A311 鉢かづき・江戸初期写本/A312 同・寛永頃刊本（以上は「糸柳」系統）

「柳」は「青柳」「糸柳」「楊柳」「柳髪」「柳の髪」と、「風」は「春風」「羽風」と、「なびく」は、「乱る」「吹く」「従ふ」「削る」「もつれる」「なみよる」「げんず」と、あるいは「(風を) 含む」「(風に) たをやか」等と、少しずつ語句が入れ代わるがきわめて類型的な表現といえる。むしろ、この、似てはいるものの、少しずつ違うところが御伽草子の特徴である。

誠に、青柳の、春風にいとふきくださす、こすゑ、かすかに、なひきたるよりも、なを、たをやかに、花のかほはせ匂ひみちたり。(008)

かみの、かかりなどは、あをやきのいと、春風に、みたるるさまして、いふはかりなく、うつくしく(355)

ひすいの、かんざし、たをやかに、やなきの風に、なひくになたり。(194)

そのすがた、たへにして、やうりうの風になびき、ひすいのかんざし、せみのはの、すきとをりたるがことし(037)

ひすひのかんざし、りうはつ、かせにみたれ、かつらのまゆの、にほひは、ありあけの月の、ほのほのと、くもまにのこる、ことくなり(128)

以上が①のパターンであるが、②として、特に髪を「青柳の糸」または「柳の糸」（風と関連ない場合に限る）にたとえる場合がある。これも参考までに示す。「秋夜長物語」ではこちらを用いることがわかる。

B001 あいそめ川・寛文頃刊本/B009 秋夜長物語・永和3写本(2例)/B010 同・室町絵巻(2例)/B011 同・文禄5写本(2例)/B012 同・天文9写本(2例)/B013 同・室町末絵巻(2例)/B014 同・片仮名古活字本(3例)/B015 同・平仮名古活字本(2例)/B101 観音本地・慶長以前奈良絵本/C108 木曾よし高物語・慶長9写本/B132 幻夢物語・寛文8写本/A170 さごろもの大将・室町末写本/A185 しぐれ・寛永頃奈良絵本/B367 法蔵比丘・近世奈良絵本/F398 紅葉合・江戸初期写本/C401 文殊姫・近世奈良絵本

はなのかほばせにほやかに。みどりのくろかみは、あをやぎの、いとうつくしき、なんしなり。(001)

若公、金砂ノ水干ニ、ナヨヒカニ、打シホレタル、躰ニテ、見人モヤト、カカリニシタニ、立チャスライタレハ、乱テ懸ル青柳ノ、キトト云計ナク、ミヘタルニ(009)

あふきさしかさし、うちゑみ給ふ御けしき、あくまでけたかく、御くしは、柳の糸をみたせるかことし(185)

掛詞になっている場合が多い。

②の表現方法は歌に見られる見立てを髪の描写に応用したものであろう

③未央の柳<sup>38)</sup>④柳のまゆ (ずみ)<sup>39)</sup>

## ⑤その他

このうち最も多いパターンが①の、姿または髪を、風になびく柳にたとえるもので、65例見られる。(一部「風」と共に用いる②も含む。)[「柳」の部分进行分类して以下に示す。公家小説では「青柳」系統が多く、「柳」系統は少ない。武家小説では「楊柳」系統が見えない。

A008 秋月物語・江戸初期写本/C016 あきみち・近世奈良絵本/A050 岩屋の物語・室町末江戸初期間 (2例)/B142 高野物語・近世写本/A167 桜の中將物語・江戸初期写本 (2例)/A184 しぐれ・正保慶安刊本/A185 しぐれ・寛永頃奈良絵本/A197 十二人姫・寛文10写本 (2例)/F200 秀祐之物語・大永写本/C259 玉藻の草子・承応2刊本/G265 短冊の縁・江戸中期写本/F284 鶴の草子・寛文2刊本/D297 常磐の姥・室町奈良絵本/G316 花子ものぐるひ・寛文延宝刊本/B319 花みつ・寛文元禄奈良絵本/A321 花世の姫・明暦2刊本/D355 文正草子・寛永前後奈良絵本/D356 文正草子・慶長元和奈良絵本/D357 文正草子・慶長元和奈良絵本/C400 もろかど物語・寛永6写本/C407 横笛物語・室町末写本/C408 同・近世丹緑本 (以上「青柳」の系統)

F179 山海相生物語・近世絵巻/C192 しみづ吉高・慶長前後写本/C194 しみづ物語・寛文延宝刊本/C209 浄瑠璃御前物語・慶長頃写本/C260 田村の草子・寛永古活字本/C278 土蜘蛛草子・室町絵巻/B299 鳥部山物語・近世写本/G316 花子ものぐるひ・寛文延宝刊本/A321 花世の姫・明暦2刊本/E366 宝月童子・寛永頃奈良絵本/C375 堀江物語・寛文7刊本/A384 窓の教・江戸後期写本 (2例) (以上「柳」系統)

A002 青葉の笛・室町末写本/B037 石山物語・明暦4刊本/A096 神代小町・寛永頃絵巻/A099 唐崎物語・寛文頃写本/F126 月林草・近世写本/A130 源氏供養物語・室町江戸初期絵巻/A148 小式部・近世写本 (2例)/B196 釈迦の本地・寛永20刊本/A239 千手女物語・江戸初期写本/G265 短冊の縁・江戸中期写本/F306 鼠の草子・室町末絵巻/C374 堀江物語・近世写本 (2例)/C375 堀江物語・寛文7刊本 (以上「楊柳」系統)

A002 青葉の笛・室町末写本/A003 青葉のふえ・寛文7刊本/A096 神代小町・寛永頃絵巻/B128 賢学草子・室町絵巻/B246 滝口物語・江戸初期写本/F323 はまぐり・近世奈良絵本/A335 一本菊・万治3刊本/F336 姫百合・江戸初期写本 (2例)/F337 同・寛文延宝刊本 (以上は「柳髪」系統。但し、最後の2本は「柳の髪」)

99 (38) 花鳥風月を以てする美人描写

嬋娟たる、秋の蟬の、はつもとゆひ、宛転たる蛾眉の、黛の匂、花にも嫉れ、月にもそねまれぬへき、もものかほはせ、ちちの媚、絵にかくとも、筆におよひかたく、語に詞もなかるへし(010)

かすみの、まゆずみ、ほのほのと。せんげんたる、りやうびんは。秋のせみのほに、たぐへ。えんでんたる、御かほばせは。春は。花にねたまれ。秋は、月にそ、ねたまれ給ふ御ふぜひなり。(312)

せんげむたる両びん。ゑんでんたる、かいのまゆずみの匂ひ。花にもねたまれ、月にもそねまれぬべき。もものかほばせ、ちちのこび。ゑにかくとも、筆にも及がたく。かたるに言葉、なかるべし。(316)

御くしの、ゆうゆうとかかりたる、ねみたれかみは、あをやきの、風になひきたるよりも、なを、たをやかに、まゆくちつき、あひきやうこほるる、心ちして、花にも月にもねたまれ、そねまれぬへき、御ありさまなり(167)

「舞の本」では、かなり変形しているが次のような例が見える。「秋夜長」と同様(8)(9)と(10)が関連した形をとっている。

それ窈窕たる紅の顔ばせ、花に猜まれし姿も、夕べの風に誘はれ、嬋娟たる緑の眉墨、月に妬まれし形も、暁の雲に隠れ(満仲)

ちなみに(8)(9)は出典が明らかであるが、(10)は不明である。『太平記』に次のようにあるが、他の軍記物語には見えない。

花をそねみ月をねたむほと女はうたちを十二人おなしやうにしやうそくせさせて(二十一・塩冶判官讒死の事)

文脈から考えれば「花にねたまれ、月にそねまれ」の方が妥当であろう<sup>36)</sup>。従って、『太平記』の表現は「花にねたまれ、月にそねまれ」の影響によって生まれた表現ではなかろうか。他に例を見出せないことから、(10)の表現は実は「秋夜長物語」が原形ではないかと想像するがいかがであろうか。この作品と『太平記』の作者が叡山の学僧、玄慧という説もある<sup>37)</sup>。

(11) 柳・風・なびく

(10)までの表現は、決まり文句や漢籍そのままの引用で、むしろ(11)(12)(13)こそが花鳥風月を用いる表現としてふさわしいものである。

御伽草子の中で、美人を柳にたとえる表現は112例ある。これらを分類すれば以下の通りである。

- ①風に靡く柳の類
- ②柳の糸の類

ひすいの、かんざし、にほやかに、せいたいの、まゆすみは、ゑんざんの、いろふかく、ふよふの、まなしり、あさやかに、にんにくのはだへ、たえにして、たまのひまりをますがごとし(374)

せんげんたる、くろかみは。みだれて、くさにまとはり。ゑんでんたりし、さうがは、ゑんざんのいろを、うしなへり(001)

すなわち、ともすれば出典が不明になりかねない形(すでにわからなくなっている可能性もある)で、これらの一部分のみを使う例が少なくない。

ところで、「秋夜長物語」の七つの伝本では、「宛転たる双蛾」が「宛転たる蛾眉」になっている<sup>35)</sup>。

嬋娟タル、秋ノ嬋ノ、初モト云、宛転タル、蛾眉ノ黛ノニホヒ、花ニモ、ネタマレ、月ニモソネマレヌヘキ、百ノカホハセ、千千ノ媚、絵ニカクトモ、筆モ及カタク、語ニ云トモ、コトノ葉。ナカルヘシ(009)

前半は『和漢朗詠集』の先にあげた部分によっているのであろうが、「宛転たる蛾眉」の部分は『長恨歌』にある「宛転たる蛾眉 馬前に死す」によるものではなかろうか。このすぐ後の部分も同じく『長恨歌』の「眸を回して一笑すれば百媚生じ」の部分进行想像させる。すなわち、単なる作者の勘違いというのではなく、「宛転たる」という共通部分を利用して、二つの出典をうまく利用したとみてよいのではないか。他の語の使い方も原典とは多少変えてあり、この作者に限っていえば、漢籍を自分の文体に自在に取り入れるといった文章力を感じさせるのである。

#### (10) 花にねたまれ、月にそねまれ

次の伝本に見えるが、(8)(9)と同じく、「秋夜長物語」の伝本が多い。語の入れ替わりや省略が多少見える。

B009 秋夜長物語・永和3写本/B010 同・室町絵巻/B011 同・文禄5写本/B012 同・天文9写本/B013 同・室町末絵巻/B014 同・片仮名古活字本(2例)/B015 同・平仮名古活字本/167A 桜の中將物語・江戸初期写本/176C さよごろも・寛文9刊本/190B しのばずが池物語・寛文8刊本/311A 鉢かづき・江戸初期写本/312A 鉢かづき・寛永頃刊本/316G 花子ものぐるひ・寛文延宝刊本

(10)は「秋夜長」のすべての伝本で先の(8)(9)の後に位置している。「鉢かづき」と「花子ものぐるひ」もこれによっている。また、「桜の中將」のように(8)(9)と関係なく単独で用いられるものもある。

101 (36) 花鳥風月を以てする美人描写

本

さらに、(8)と(9)に関連する「遠山の色〔月〕」の見える伝本もしめしておく。

001B あいそめ川・寛文頃刊本/096A 神代小町・寛永頃絵巻/134B 恋塚物語・明暦頃刊本/316G 花子ものぐるひ・寛文延宝刊本/316同/374C 堀江物語・近世写本/375C 堀江物語・寛文7刊本

「宛転たる双蛾」と「秋の蟬の羽」と「遠山の色」は相互に関連していて、たとえば次のように用いられる。

此君のみめかたち。たとへをとるに、ためしなし。ふようのまなじり。たんくはの口びる。せんげんたる両びんは。秋のせみのはによそへ、ゑんでんたる、さうがは。ゑんざんの色と、つくられし。しじんもこれを、ほめんには。さらに詞に、及べからず。(316)

これは『和漢朗詠集』の次の個所によるものである<sup>31)</sup>。

嬋娟たる両鬢は秋の蟬の翼（はね）宛転たる双蛾は遠山の色（下・妓女）

そして、この部分は、軍記物語など他の作品でも、ほぼそのままの形で採用されていることが多い。

嬋娟タル両鬢ハ秋ノ蟬ノ翼、宛転タル双蛾ハ遠山ノ色、一タビ咲メバ百ノ媚ナル。(海道記)<sup>32)</sup>

鮮娟タル両鬢ハ秋ノ蟬ノ翼ヲ並べ、宛転タル双蛾ハ遠山ノ色ニマガヘリナムド云モ、カクヤト覚テ哀也(延慶本平家・第五本72ウ)

嬋娟たりし両鬢も、膚にかしけて墨乱れ、ゑんゑんたりし双蛾も遠山の色を失ふ(謡曲・卒塔婆小町)<sup>33)</sup>

嬋娟たる両鬢は、秋の蟬の羽にたぐへ、宛転たりし双蛾は遠山の月に相同じ(舞の本・敦盛)<sup>34)</sup>

ただ、御伽草子ではこの部分をほぼそのままの形で引くのは先に示した「花子ものぐるひ」のみである。多くは、「宛転たる双蛾」のみ、「秋の蟬の羽」のみ、あるいは「遠山の色」のみ、あるいはこのうち二つを組み合わせるという傾向が見られる。

はちすの前と申は、月をねたむ、御よそほひ、ゑんせんたりし、さうがは、露をふくめる、いとほぎの、かこと計に、さきそむる、花よりもなを、うつくしく(190)

かすみの、まゆずみ、ほのほのと。せんげんたる、りやうびんは。秋のせみのはに、たぐへ。(312)



人成道の始めとなりし語)

「翡翠のかんざし」の形で見えるのは『平家物語』である。この部分は延慶本・覚一本・長門本・盛衰記共に見える。

桃李の御装猶こまやかに、芙蓉の御かたちいまだ衰へさせ給はね共、翡翠の御かざしつけても何にかはせさせ給ふべきなれば、遂に御さまをかへさせ給ふ。(覚一本・灌頂巻・女院出家)

『曾我物語』にも2例ある。

やがて、翡翠のかんざしをきり、花の袂をぬぎかへて、こき墨染にあらためつ、以上の場合は出家の場面に限られているが、『平家』の長門本<sup>30)</sup>になると次のように御伽草子の用例に類似したのも見える。

せいたいのまゆつきあひあひしく、ひすいのかんざしたけにあまれる(巻十・渡左衛門妻子事)

#### (8) 宛転たる双蛾(蛾眉)・(9) 秋の蟬の羽

(8)と(9)は出典が関連するのでともに述べることにする。「双蛾」「蛾眉」と共に美しい眉を蛾にたとえたものであり、「秋の蟬の羽」は美しい髪をたとえたものである。

「宛転たる双蛾(蛾眉)」

次の伝本に見られる。「秋夜長物語」の伝本の例が半数以上を占め、これら以外は江戸期の伝本である。下線のあるものは「蛾眉」である。

001B あいそめ川・寛文頃刊本/009B 秋夜長物語・永和3写本/010B 秋夜長物語・室町絵巻/011B 秋夜長物語・文禄5写本/012B 秋夜長物語・天文9写本/013B 秋夜長物語室町写本/014B 秋夜長物語・片仮名古活字本/015B 秋夜長物語・平仮名古活字本/096A 神代小町・寛永頃絵巻/190B しのばずが池物語・寛文8刊本/316G 花子ものぐるひ・寛文延宝刊本(2例)

「秋の蟬の羽」

次の伝本に見られる。傾向は(8)にほぼ同じ。

009B 秋夜長物語・永和3写本/010B 秋夜長物語・室町絵巻/011B 秋夜長物語・文禄5写本/013B 秋夜長物語室町写本/014B 秋夜長物語・片仮名古活字本/015B 秋夜長物語・平仮名古活字本/037B 石山物語・明暦4刊本/134B 恋塚物語・明暦頃刊本/148A 小式部・近世写本/312A 鉢かづき・寛永頃刊本/316G 花子ものぐるひ・寛文延宝刊本/345C 富士山の本地・延宝8刊本/346E 富士の人穴の草子・慶長8写本/367B 法蔵比丘・近世奈良絵本/397D 物ぐさ太郎・寛永頃刊

103 (34) 花鳥風月を以てする美人描写

316G 花子ものぐるひ・寛文延宝刊本/332A 美人くらべ・万治刊本/335A 一本菊・万治3刊本/335同(かみ)/343F ふくろうのそうし・明暦4写本/371E 蓬萊物語・寛文元禄絵巻/372E 蓬萊山由来・寛文4刊本/374C 堀江物語・近世写本/375C 堀江物語・寛文7刊本/380A 松風むらさめ・万治2刊本/383B 松虫鈴虫讃嘆文・室町末写本/397D 物ぐさ太郎・寛永頃刊本/400C もろかど物語・寛永6写本/401A 文殊姫・近世奈良絵本/403C 雪女・寛文5刊本

表現上の特色としては、「ゆりみだし」「ゆりかけて」「うちなびき」など(38/101/310/311/355)や「たおやかに」(161/192/194/265/284/316/375/397)のように五音の、同じまたは類似した語が後続するといった傾向がある程度見える。また、他の「○○の○○」型の決まり文句と併用するという傾向もあるが、(1)(3)(4)(5)(6)ほどではない。

舟サシ寄テ、見ケレハ、ヒスイノカンサシハ、汀(カワ)ノ水ニユラレ、蛾眉ノ黛ハ、岩打ツ波ニ、アラハレテ、空ツ蟬ミノ、有ルモ空シキ、御姿也(012)

ひすいのかんさし、玉のすたれに、かかりて、ひかへければ(040)

うすくれなるの、三糸のはかま、ひすいのかんさし、ゆりかけて、(101)

ひすいのかんざしは、たわやかにして、やなきの風に、したかふににたり(192)

ひすいのかんざし。せんげんのびん。かつらのまゆずみ。うつくしき御かほばせ。中々いふも、をろかなり(380)

むしろ、(1)から(6)までと大きく異なるのは、髪を形容する他の表現と同時に用いる例が多く見られる点である。半分程度がこの例である。

そのすがた、たへにして、やうりうの風になびき、ひすいのかんざし、せみのはの、すきとをりたるがことし(037)

ひすいの、かんざし、たをやかに、やなきの風に、なひくににたり。(194)

ひすひのかんさしの、くろかりしかみは、はるののの、うらうらなる、かせに、なひくかことし(217)

ひすいのかんざしは、たていたに、からすみを、すりなさせる、ことくなり(400)

これは、「翡翠」がほとんど比喩の意味をなさず、美称程度の働きになっていることを意味する。多用されてきたための結果であろう。

さて、「翡翠の髪」の早い例として(5)のみえた『法華百座法談聞書抄』があげられる。

我イツチモユキウセナムトオホシテ、城ノ門ノホカニヒスイノ髪ミヲミタリテ、タタヒトリアユミイテテ(34・驕雲彌の出家を阿難の勧めにより佛許し給ひ、女

ふやうの、まなこしり、あさやかに、はちすをふくむ、くちひる、けんろのをと  
 かい、たまにして、らんしやののをひ、なつかしく(311)

いしやうに。たき物をせざれとも。をのつから、らんしやの、にほひを出す  
 (259)

『平家物語』の延慶本に3例見えるが、美人描写としては王昭君を描写する  
 次の例が近い。

遠山ノ緑ノ黛モ、胡国ノ雪ニ埋レ、蘭ジャノ昔ノ匂モ、左齊ノ風ニ跡ヲ消ス(第  
 一末96ウ)

覚一本<sup>29)</sup>には次のようにあるが(延慶本・長門本にも同様個所あり)、

蘭麝の匂に引きかへて香の煙ぞ立のぼる(灌頂巻・大原御幸)

むしろ『盛衰記』の次の例の方が御伽草子の例に類似する。

五人ノ女侍所ニ并居タリ。入道先景色ヲ見レハ、紅顔色鮮ニシテ、白紛媚ヲ造レ  
 リ。容良品コマヤカニシテ、蘭麝ノ匂ナツカシ(巻十七・祇王祇女)

『曾我物語』や『太平記』には見えず、御伽草子の「花鳥風月」あたりが流  
 行させた表現かもしれない。

### (7) 翡翠のかんざし

カワセミの羽のように黒くつややかな髪をいう。

次の伝本に見える。「翡翠」に後続する語が「髪」または「かかり」である  
 こともあるが、ほとんどが「翡翠のかんざし」である。(7)までの決まり文句  
 の中で、いちばんよく用いられる表現であり、(6)までに見えない伝本、た  
 とえば「秋夜長物語」のような伝本が半数近くある点が他と異なる。

012B 秋夜長物語・天文9写本/037B 石山物語・明暦4刊本/038C いそざき・寛  
 文頃奈良絵本/040B 巖島の本地・室町末写本/050A 岩屋の物語・室町末江戸初  
 期写本(ママ)/076A 扇流し・延宝7刊本/101B 観音本地・慶長以前奈良絵本(2  
 例)/126F 月林草・近世写本/128B 賢学草子・室町絵巻/140A 興福寺の由来物  
 語・室町写本(かかり)/148A 小式部・近世写本/161A 西行の物がたり・江戸初  
 期写本/174B ささやき竹・近世絵巻/178D さるげんじ・寛永正保丹緑本/192C  
 しみづ吉高・慶長前後写本/194 しみづ物語・寛文延宝刊本/196B 釈迦の本地・  
 寛永20刊本/209C 浄瑠璃御前物語・慶長頃写本/210C 浄瑠璃十二段草子・慶長  
 頃写本(2例)/217F 雀さうし(近世前期写本)/259C 玉藻の草子・承応2刊本/  
 265G 短冊の縁・江戸中期写本/284F 鶴の草子・寛文2刊本/308B 箱根本地由  
 来・江戸初期写本/310C 橋弁慶・近世奈良絵本/311A 鉢かづき・江戸初期写本/

先の「太液の芙蓉」を『源氏物語』が『長恨歌』より「太液芙蓉，未央の柳も，げに，かよひたりしかたち」と引用したという伝統が関連してこよう。一方，「芙蓉のまなじり」は(4)でのべたように，漢籍ではなく仏典関連からきた決まり文句であるように思う。

先に，仏典あたりの「青蓮の眼」を「芙蓉のまなじり」にしたのではないかと述べたが，『和漢朗詠集』<sup>27)</sup>の巻下（仏事 596）に阿難尊者の目元を蓮にたとえる例がある。

蓮眼豈養清涼水 面月長留十五天（眼の蓮はあに清涼の水に養はれんや 面の月は長く十五の天に留めたり）

さて，「芙蓉の眼」の古い例として『法華百座聞書抄』<sup>28)</sup>があげられる。

ケウトムミ，桃李顔（タウリノカホハセ）ニ含怨ヲ，芙蓉眼（フヨウノマナコ）ニ浮涙ヲ（34・驕雲彌の出家を阿難の勧めにより佛許し給ひ，女人成道の始めとなりし語）

この院政期の資料以降，『太平記』あたりまでの空白をうめる例がない。説話や中世前期の軍記物語等にその例が見いだせないままなのである。

## (6) 蘭麝の匂い

蘭の花や麝香のようなよい香りをいう。

次の伝本に見える。「蘭麝」に後続する語は「匂い」が多いが，一部に「香り」「かうばせ」がある。分類の偏りは見えないが，「花鳥風月」の伝本と「玉藻前」の伝本の用例が目立つ。ほとんどの伝本が(1)(2)(3)(4)(5)(7)と重なる。

075A 扇合物がたり・室町写本/092A 花鳥風月・文禄4 奈良絵本/093A 花鳥風月・慶長元和古活字本/107A 衣更着物語・貞享5 刊本（香り）/112E きまん國物語・享禄2 写本/148A 小式部・近世写本/174B ささやき竹・近世絵巻（ママ）/257C 玉藻前物語・文明2 写本（かうばせ）/257同/259C 玉藻の前・寛文頃奈良絵本/259同/259同/302 七草姫・近世奈良絵本/311A 鉢かづき・江戸初期写本/406B 横笛草子・室町後期写本

「かうばしく」「なつかしく」「あざやかに」などの五音節の語が後続して七五調の文を構成したり（75/92/93/112/259/302/311/406），他の決まり文句と併用するものが目立つ。

はくせつのはたへ，すきとをり，たまのかんさし，ゆりかけて，らんしやのにほひ，かうはしく，（093）

なかろうか。

### (5) 芙蓉のまなじり (まなこ)

ここで「芙蓉」とは「蓮の花」をいう。すなわち、「芙蓉のまなじり」とは「蓮の花のように清く涼しげ目元」をいう。

次の伝本に見える。分類の偏りはないが、すべての伝本が(1)(2)(3)(4)(6)(7)と重複する。

076A 扇流し・延宝7刊本/112E きまん國物語・享祿2写本/148A 小式部・近世写本(まなこ)/150A 小伏見物語・寛永頃奈良絵本/161A 西行の物がたり・江戸初期写本/176C さよごろも・寛文9刊本/209C 浄瑠璃御前物語・慶長頃写本/225F 墨染桜・承応2刊本/246B 滝口物語・江戸初期写本/311A 鉢かづき・江戸初期写本/316G 花子ものぐるひ・寛文延宝刊本/335A 一本菊・万治3刊本/366E 宝月童子・寛文頃奈良絵本/374C 堀江物語・近世写本/383B 松虫鈴虫讃嘆文・室町末写本(当て字)/395C 村松物語・寛文元禄奈良絵本

(4)と同様、ほとんどが「○○の○○」型決まり文句と並列して用いられる。特に、(4)の「丹花の唇」と並んで用いられることが多い。1例のみ「芙蓉のまなこ」である。

ひすいのかんざし、たをやかに、ふようのまなじり、たんくわのくちひる、まことに、この世には、ならふかたなふこそ、おほえける(161)

みとりのまゆすみ、ほそやかに、たんくわのくちひる、いつくしく、ふやうのまなしら、あさやかに、けんろのおとかい、たまににて、(206)

ふようのまなしり、たんくわのくちひる、やなきのまゆすみのにほひ、かみは、せいたるかたていたに、こんろきのすみを、なかすことし(395)

いつくしさ、よのつねの人とも、覚えず、さなから、ふようのまなこ、玉のむね、すかたを、ものにたとうれは、たうのやうきひ、(148)

なお、目元に関しては単純な直喩はないが、「くちびるはふようのごとし」(037B 石山物語・明暦4刊本)という例が1例のみある<sup>26)</sup>。

また、目元以外に姿や顔を「太液の芙蓉」(169/316/322/355/360/361)や「芙蓉の暁の波に浮かべるごとし」(96/316)のように漢籍を典拠にしてたまたま例も少なからず見える。これらに関連した決まり文句「芙蓉の顔ばせ」「芙蓉のかたち」は御伽草子では1例のみで一般的ではない。謡曲や軍記物語などではむしろこちらが一般的で、たとえば『平家』の延慶本・覚一本ではこちらが見える。「芙蓉のまなじり」は長門本や『太平記』でないと出てこない。

(383B「松虫鈴虫讚嘆文」室町末写本)

また、1例のみ「丹花の口」とある。『源平盛衰記』にも「タンクハノ口付」(一九・文覚発心)とあるが、「丹花の唇」から派生したものであろう。

ほうほうまゆに、うすけしやう、たんくわの、くちのうちには、くれないのはなをくくむか、ことくなり(400)

後続する語が「い(う)つくしく」「あざやかに」のようにある程度固定的な面もあるが、むしろ、ほとんどが他の「○○の○○」型決まり文句と並列的に用いられる点に特色がある。

たんくわの、くちひる、あさやかに、せいたいの、まゆすみ、ほのほのと、いろねもふかき、はつ春の、はつねのけふの、たまさかに、さきとめたる、はるの花よりも、めつらか也(075)

せいたいのまゆすみ、たんくわのくちひる、いつくしく、ふようのまなしり、あさやかに、らんしやのにはほひ、かうはしく(112)

御かんさしは、御たけにあまり、あひきやうの、御まなしり、たんくわのくちひる、雪の御はたえ、うつくしくとも、申もおろか成(268)

「丹花の唇」は『太平記』に次のようにある。

ほのかに見えたるまゆのにはほひ、ふようのまなしり、たんくわのくちひる(太平記二十一・塩冶判官讒死の事)

『平家物語』の延慶本や覚一本には見えない。『曾我物語』にも見えないし、中世の説話等にも見えない。

「丹花の唇」は、仏の唇を赤い果実にととえて形容する「丹果の唇」が転じたもの(『日本国語大辞典』)またはその誤り(『大漢和辞典』)等とされている。

その是非を論ずる用意はないが、たとえば、「三十二相」のように、仏の尊容を表す語が美人描写に転じられることは御伽草子等ではしばしば見える。『往生要集』<sup>25)</sup>に次のようにある。

座の上に仏ましまして相好無辺なり。烏瑟高く顕れて晴天の翠濃く、白毫右に旋りて秋月の光満つ。青蓮の眼、丹菓の唇、迦陵頻の声、師子相の胸、仙鹿王の脛、千蝠林の跣、かくの如き八万四千の相好、紫磨金身に纏ひ絡り、無量塵数の光明、億千の日月を集めたる如し(巻上・大文第二)

このような描写は、決まり文句を並べていく美人描写の方法の下敷きになっているといつてよい。「青蓮の眼、丹菓の唇」は仏の尊容を形容する決まり文句であるが、これをそのままの形ではなく、「芙蓉のまなじり」「丹花の唇」と少し変えた形で美人描写として転用していったと考えるのは自然では

(1)(2) と異なる点である。決まり文句として固定したのが他に比べるとやや遅いであろうか。古写本に多い点から考えると、室町時代に流行しはじめた決まり文句かもしれない。

他の決まり文句と並列することもあるが、特に前後の表現が固定的とはいえない。

ゆきのはたゑ、しろければ、月のひかりに、くまもなし(026)

らんはそうわう、たち給ゐて、こんつによの、たけにあまれるかんさしを、てにからまきて、しやけんのゆかにふきふせて、雪のはたへの、くまなきふところを、さかし給ふ(110)

ひめきみ、ものすきまより、みたまへは、はなのかうはせ、いろかはり、ゆきのはたへも、くろくなり、すかたもおとろへはてて(350)

出典については(1)と同様『長恨歌』が関連していると思われる。

王朝物語の系統や謡曲には見えないが、『曾我物語』<sup>23)</sup>『太平記』<sup>24)</sup>『源平盛衰記』の軍記物語に見える。

雪の膚、しばしはおとろへたる御容、いとどはりなくおぼえたり(曾我物語)  
やをぬきて御きずをすひけるに、なかるゝ血、ゆきの御はだへをそめて、みまいらするにめもあてられず(太平記九・主上、上皇御沈落の事)

#### (4) 丹花の唇

次の伝本に見える。23 伝本中 22 本までが(1)(2)(3)(5)(6)(7) と重なる。分類等の偏りは見られない。

075A 扇合物がたり・室町写本/076A 扇流し・延宝 7 刊本/092A 花鳥風月・文禄 4 奈良絵本/093A 花鳥風月・慶長元和古活字本/107A 衣更着物語・貞享 5 刊本/112E きまん國物語・享禄 2 写本/161A 西行の物がたり・江戸初期写本/174 B ささやき竹・近世絵巻/176C さよごろも・寛文 9 刊本/180B 三人法師・寛永頃丹緑本/193C しみづ物語・寛永写本/196B 釈迦の本地・寛永 20 刊本/209C 浄瑠璃御前物語・慶長頃写本/225F 墨染桜・承応 2 刊本/246B 滝口物語・江戸初期写本/268A 中将姫・慶長前後絵巻/290B 天照大神本地・元禄頃写本/316G 花子ものぐるひ・寛文延宝刊本/336F 姫百合・江戸初期写本/337F ひめゆり・寛文延宝刊本/366E 宝月童子・寛文頃奈良絵本/395C 村松物語・寛文元禄奈良絵本/400C もろかど物語・寛永 6 写本(口)

単純な直喩が次のごとく 1 例のみあるが、文体の工夫によるものであろう。

ウルホヘル口ヒルハ、タンクワノコトシ、アフラツクル、ハタエハ、白雪ニ似タリ

## 109 (28) 花鳥風月を以てする美人描写

は、かせとなりてし、ちりにけりこそ、いたわしけれ(311)

なお、(1)から(7)の決まり文句はこれら以外の「○○の○○」型の決まり文句と併用することが多いが、「花の姿」の場合はそれが311の例のように「月の○○」に限られている。

出典については不明であるが、『源氏物語』に光源氏の姿をたとえる藤壺の女御の歌がある。

大かたに花のすがたを見ましかば露も心のおかれましやは(花宴)

『源氏』以降『夜の寝覚』『狭衣物語』等の物語には見えないが、中世になって『平家物語』の延慶本に次のようにある。

分段ノ秋ノ霧, 玉躰ヲカシテ, 無常ノ春ノ風, 花ノ姿ヲサソヒキ (第六末 93 ウ)

覚一本や長門本にも同様の表現があり、これらの例は御伽草子での用法と類似している。

### (3) 雪のはだえ

次の伝本に見える。古写本が目につく。25 伝本中 17 伝本が(1)(2)(4)(5)(6)(7)と重なる。

001B あいそめ川・寛文頃刊本/026B あみだの本地・天文 21 写本/049A いわや物語・慶長 13 写本/050A 岩屋の物語・室町末江戸初期間奈良絵本/050同/063D 瓜子姫物語・近世初期絵巻/076A 扇流し・延宝 7 刊本/110B 貴船の物語・室町写本/111B 貴船の本地・明暦頃丹緑本/112E きまん國物語・享禄 2 写本/161A 西行の物がたり・江戸初期写本/164B 嵯峨物語・近世中期写本/167A 桜の中將物語・江戸初期写本/174B ささやき竹・近世絵巻/193C しみづ物語・寛永写本/244E 大仏之縁起・元和元年写本/268A 中將姫・慶長前後絵巻/290B 天照大神本地・元禄頃写本/332A 美人くらべ・万治刊本/350A 伏屋の物語・室町末写本(2例)

「白雪のはだえ」の見える伝本も次に示す。最初の 4 本は「花鳥風月」の異本関係にある伝本である。

075A 扇合物がたり・室町写本/092A 花鳥風月・文禄 4 奈良絵本(しらゆき)/093A 花鳥風月・慶長元和古活字本/107A 衣更着物語・貞享 5 刊本/126F 月林草・近世写本/401B 文殊姫・近世奈良絵本

雪にたとえる例は全体で 55 例、うち肌をたとえるのが 40 例見え、「雪のはだえ」の形が 21 例、「白雪のはだえ」とあるのが 7 例ある。すなわち、単純な直喩「雪のごとくなる肌」(但、肌というより胸、足等) 14 例も見える点が、



なお、延慶本『平家物語』<sup>19)</sup>にも次のようにある。

花ノ顔バセ譬ム方ナク、望月ノ山葉ヨリ出ル心地シテ (第六末 72 ウ)

長門本や覚一本には「花の顔ばせ」は見えない。一方「源平盛衰記」<sup>20)</sup>には延慶本と個所は異なるが「花の顔ばせ」が見える。

雲ノ鬢、霞ノ眉、花ノカホバセ、雪ノ膚、絵ニ書トモ筆モ及ガタシ (四十二・玉蟲立扇)

なお、「花の顔」については、『源氏物語』<sup>21)</sup>で紫上をたとえた次の歌が見えるし、『松浦宮物語』<sup>22)</sup>にも次のごとく見える。

奥山の松のとぼそをまれにあけてまだ見ぬ花の顔を見るかな (源氏・若紫)

そこらみつる舞ひめの花のかほも、ただつちのごとくになりぬ (松浦宮十二・商山夜曲)

このような表現も「花の顔ばせ」の成立に関連していると思われる。

## (2) 花の姿

次の伝本に見える。多くは江戸期の伝本である。分類の偏りはない。14本中6本が(1)(3)(4)(5)(6)(7)と重なるが、七つの決まり文句の中で最も重なる度合いが低い。

067B 恵心僧都物語・寛文4刊本/081D 音なしの草子・永禄13 絵巻模写/082C 大原御幸・慶長頃奈良絵本/126F 月林草・近世写本/150A 小伏見物語・寛永頃奈良絵本/153A 小町のさうし・寛永頃丹緑本/195B 釈迦の本地・江戸初期写本/196B 釈迦の本地・寛永20刊本(2例)/249A たなばたの本地・寛永7写本/265 G 短冊の縁・江戸中期写本/302A 七草姫・近世奈良絵本/311A 鉢かづき・江戸初期写本/312A 鉢かづき・寛永頃刊本/331B 毘沙門天之本地・承応刊本

「花の顔ばせ」と同じく単純な直喩「花のごとくなる姿」は1例もない。

前後の表現は固定的ではないが、状況がきわめて似ている。すなわち、死に対する時の生存時の、老いに対する若い時など、「今」に対する「以前」の「花の姿」なのである(82/126/150/195/196/249/265/302/311/312)。

ふしのさうふうは、はなのすかたさそひ、あらきなみ、きょくかんを、かくしたてまつる(082)

有為てんへんの、ことほりにや、花のすかたも、かれはてて(126)

にうばうたちも、三人かみをそり、花のすかたを、ひきかへて、こきすみそめのころもに、身をやつし、御けうやう、ねんころに、とひ給ふ(249)

むなしきのへに、おくりすて、はなのすかたは、けふりとなりて、月のかたち

### (1) 花のかほばせ

次の伝本に見られる。江戸期の写本に多いが古写本にも見える。特に分類の偏りはない。15 伝本のうち 9 本は (2)(3)(4)(5)(6)(7) にあがる伝本と重なっている。

001B あいそめ川・寛文刊本/008A 秋月物語・江戸初期写本/096A 神代小町・寛永頃絵巻/150A 小伏見物語・寛永頃奈良絵本 (2 例)/158B 金剛女の草子・江戸初期写本/172A さごろも・寛永頃丹緑本/196B 釈迦の本地・寛永頃 20 刊本/257C 玉藻前物語・文明 2 写本/259C 玉藻の前・寛文頃奈良絵本/284F 鶴の草子・寛文 2 刊本/289C てんぐのだいら・寛永正保丹緑本/301D 七草の草子・寛文頃絵巻/336F 姫百合・江戸初期写本/337F ひめゆり・寛文延宝刊本/350A 伏屋の物語・室町末写本 (2 例)

単純な直喩「花のごとくなる顔ばせ」は 1 例もないことから、御伽草子では固定的な決まり文句の一つとあってよい<sup>16)</sup>。後続する語が「あざやかに」「いろやかに」「うつくしく」等類似した語が続く場合も見られるが、必ずしも前後の表現までが固定的とはいえない。むしろ少しずつ違うところに特色があるといってよい<sup>17)</sup>。

はなのかほばせにほやかに。みどりのくろかみは、あをやぎの、いとうつくしき、なんしなり。(001)

らんけいのうちに、はなのかほばせ、あさやかにして、やうきひ、ゑんしよくをあさけり (257)

きのふ見しかほ、つねよりも、花のかほばせ、いつくしく、ゆきのはたへの、くまなきに (350)

花のかほばせ、やなきの、まゆすみも、むかしにかはらす、うつくしく、おはしけり (172)

『日本国語大辞典』(小学館)でもあげているように、金春禅竹作といわれる謡曲「楊貴妃」の詞章に「雲の鬢づら、花の顔ばせ」とある。これは、『長恨歌』<sup>18)</sup>の「雲鬢花顔金歩揺」によるものであろう。同じように『長恨歌』の次の個所にみえる「雪膚花貌」が先にあげた御伽草子の 350 の例の典拠になっているのではなかろうか。

中有一人字太真 (中に一人あり 字は太真)

雪膚花貌参差是 (雪膚 花貌 参差として是れなり)

いずれにしろ、『長恨歌』の室町時代において通行していた訓読から「花の顔ばせ」という決まり文句が生まれたと考えるとよいと思われる。

全体としては、類似が最も多い。このうち「ごとし」や「ごとくなり」が約八割を占める。ついで、連想が多いがこれらは比較的長い文節を「心地（風情・けしき）して」と受ける場合が多い。また、比較も多く、「(たとえるもの)よりうつくしく」などとする場合が多い。分類に注目すると、「公家小説」では類似・比較・連想の形式が多い。「僧侶小説」では他と比べると類似の形式が多い。「武家小説」は同一・比較の形式が多い。連想も多いが、この多くは「平家花揃」の例である。

### 七 類型表現の代表例

採集した表現の中で、十本以上の伝本に見られるもの14表現を機械的に抜き出した。

- (1) 花のかほばせ…17例
- (2) 花の姿…15例
- (3) 雪のはだえ…21例
- (4) 丹花の唇…22例
- (5) 芙蓉のまなじり…16例
- (6) 蘭麝の匂い…15例
- (7) 翡翠のかんざし…43例
- (8) 宛転たる双蛾（蛾眉）…12例
- (9) 秋の蟬の羽…15例
- (10) 花にねたまれ、月にそねまれ…14例
- (11) 柳・風・靡く…65例
- (12) 女郎花・露おもげなる…27例
- (13) 山の端を出る月…12例
- (14) 姿を申せば、春の花、形を申せば秋の月…17例

「○○の○○」という決まり文句が多いが、最も多いのが(11)次いで(7)(12)である。これらに共通することは描写対象がたおやかな姿または髪である点である。すなわち、花鳥風月に限って考えれば、御伽草子の作者の容姿美の基準は「たおやかな姿」と「長く美しい髪」にあることがうかがえる。これらの表現について、検討してみることにする。

113 (24) 花鳥風月を以てする美人描写

例であって、分類にかかわらず隠喩による場合（すなわちたとえの目印のない表現）が多い。

中村明氏は現代語を対象に、直喩をあらわす言語形式を次のように分類された<sup>14)</sup>。

〔第一類〕 類似（よう・みたい・そっくり）

〔第二類〕 同一（同じ・同様・同然・等しい・異なる・変わらない）

〔第三類〕 比較（似た・近い・劣らない・まさる・比べられる・匹敵する・甲乙つけがたい・以上・顔負け・そっちのけ・より・ほど）

〔第四類〕 混同（思う・思われる・疑う・疑われる・見える・見られる・紛う）

〔第五類〕 連想（考えさせる・思わせる・しのばせる・思い出させる・思い起こさせる・想起させる・髣髴させる・連想させる・想像させる）

この形式をそっくりそのまま古典に適用するには検討を要するであろうが、上の中村分類を参考に御伽草子にみられる直喩形式を次のように分類してみた。

(1) 類似…ごとし・ごとくなり・やうなり・にたとふ・さながら等

(2) 同一…異ならず・かくや・あいおなじ・と申す等

(3) 比較…より・似る・相似る・ほど・すぐる・まさる等<sup>15)</sup>

(4) 混同…あやまつ・うたがふ・まよふ・みえる・まがふ等

(5) 連想…心地・風情・けしき・ありさま・思ひ出らるる等

(5)などは検討を要するが、ひとまずこれで分類してみることにする。なお、(4)以外が一番上の語が代表的な形式で、用例数も多い。

この表現形式と伝本の内容分類との関係を見ようとするのが表5である。

表5

	類似	同一	比較	混同	連想	隠喩	計
公家小説	29	16	26	7	32	107	217
僧侶小説	33	4	13	17	9	113	189
武家小説	19	27	33	2	29	107	217
庶民小説	4	3	6	3	3	23	42
異国小説	2	0	0	2	2	16	22
異類小説	7	6	6	2	11	34	66
その他	7	2	2	0	3	13	27
計	101	58	86	33	89	413	780

花鳥風月を以て表現する場合は全体の八割を占める。

表 4

対象	用例
姿	390
髪	115
顔	113
目・眉	64
肌	51
口・唇	29
その他	18
計	780

髪と顔を対象とする場合は同程度であるが、表現の固定性という面で違いが見える。すなわち、顔に比べて、髪は表現が固定的である。髪をめぐる表現として、決まり文句「翡翠のかんざし」「烏羽(玉)の黒髪」や、「蟬の羽」にたとえるもの、「風になびく柳」にたとえるバージョンに限られるといっても過言ではない<sup>12)</sup>。

「髪」の表現の固定化という点は、他の「部分」を対象にしたものに対して、より顕著な傾向を以てあてはまる。

目・眉をめぐる表現…「芙蓉のまなじり」や「桂の眉」「柳の眉」「霞の眉」「蛾眉」「双蛾」、眉を「遠山」の風景や「弓張月」などの月の形にたとえる表現など<sup>13)</sup>。

肌をめぐる表現…ほとんどが「雪」にたとえる表現

口をめぐる表現…ほとんどが決まり文句「丹花の唇」

その他…ほとんどが決まり文句「蘭麝の匂い」

姿や顔は漠然としてその美をとらえるのに対して、髪は黒く、長く、つややかで、眉は形、黛はぼんやりと、肌は白、唇は赤くというように捉え方が具体的である点が関連してくると思われる。

## 六 表現の形式

花鳥風月を以てする表現はすべて比喩と断言はいいが、そのうち表現形式について考察する。まず、直喩と隠喩であるが、前者が 367 例、後者が 413

## 115 (22) 花鳥風月を以てする美人描写

まことに、いにしへの、わかむらさきも、かくやとそ、おほえけり (398「紅葉合」江戸初期写本)

「平家花揃」に見られる表現とは明らかに異なる。漢籍や先行の文献によると思われるものや、類型的な表現を適当に混ぜ合わせたり、多少修飾を施したものがほとんどである。たとえば、「精進魚類物語」は『和漢朗詠集』を典拠にしているし、「紅葉合」は『源氏物語』によるものであろうし、「滝口物語」の例は類型表現「おみなえし、露おもげなる」の、「桜の中將物語」や「鉢かづき」「岩屋の物語」は「青柳の、風に靡く」の、「文正の草子」や「ぶんしやう」は「姿をみれば春の花、形をみれば秋の月」のバージョンである。

二十文節以上の例は「平家花揃」の例がほとんどである。次は重盛を描写したものである。

きさらきの、十日ころ、よもの山へ、のとかに、かすみわたりて、気色ある、あさほらけに、ひろきにわの、いけ山おもしろく、みずのころ、きよくすみて、こなたかなたの、こすゑとも、うちなひき、けしきたちて、見やられたるに、東のほとりに、やへはくばひ、こだかく、りんおほきの、さきいてたるに、うくひすのこゑ、はなやかに、なきいてたる、ほととや申さん (360「平家花揃」江戸中期写本)

「平家花揃」以外の伝本では「花子ものぐるひ」と「百万ものがたり」のみに見られるが、共に多くの花を並べる「花づくし」の例である。ともに謡曲関係の作品である。

ころは、やよひの、なかばなれば。にはにつくれる、山ざくら。はなのひもとく、ちりはてて。さかりをまつも、をそざくら。ひらきそめたる、はないろは。しらがににたる、うばざくら。……かかるびけいを、みよしのの、よしののたきの、いとざくら。よるよるてらす、月よみの。みやるにさける、いせざくら。かみのゐがきを、こえてもや。見まくほしくぞ、おもはるる。(338「百万ものがたり」万治3刊本)

以上、文節数による表現の長さから、考察したが、御伽草子の花鳥風月による美人描写は、素材や表現、さらに発想の上でも類型的傾向が強いといえよう。

## 五 表現の対象

花鳥風月を以て、容姿のどこに視点をあてて描写しているかを表4に示す。用例の半分は姿全体を描写したものである。その内容は類型的表現を含みこそすれ、様々の表現がある。次いで、髪・顔が同程度で続き、姿・髪・顔を

以上の他に次のような例がある。

御すかたふせひ、むすひのかむさしは、いつくしくも、すそにあまる、御よそほひ、とうかん、せいかなの、あをやき、ふくともみえぬ、はるかせに、みたれてなひく、かたいとの、よるへもしらす、たをやかなる御ふせい、ゑにうつすとも、をよふまし (050「岩屋の物語」室町末江戸初期間奈良絵本)

なにしおふ、花鳥の、はつねもふかき春の、はつねのけふの、たまさかに、さきそめたる、春の花よりも、猶、めつらかなる (92「花鳥風月」文禄4奈良絵本)<sup>10)</sup>

わか御人はことにすくれて、ものもの敷いろかも、人にすくれて、花にまされる、あをやきの、風になひきて、やよひ中はの、あさほらけに、しもをへたてて、見ゆる木すゑも、是にはまさらしと、みゆる心ちして (167「桜の中將物語」江戸初期写本)

指しも若くなりしときには。紅梅の少將と言れて。花やかにいつくしく、鶏舌を含み。紅気を兼ね、仙紅嬋娟の仙方の雪色をはづ。 (206「精進魚類物語」寛永正保刊本)<sup>11)</sup>

これや此、こをみしほとは、をののゑの、くつるもしらて、としをふる、されともたにの、ふちなみの、松にかかれるふせいかと、 (208「浄瑠璃物語」室町末絵巻)

れうこの、ひたいは、ありあけのつきの、くまなくてらす、そのうへに、むらさきのくもの、さつとひとむらひきおおい (209「浄瑠璃御前物語」慶長頃写本)

秋の野の、おみなめし、露をもけなる、けしきにて、その女郎花の、一ゑたに、雨そそくにことならず、はんなんしか、いもうととも、いわれぬへし (246「瀧口物語」江戸初期写本)

御すかたは、やうりうの、風になひき、春の雨にほほゑむ庭のかいたうの、ねふれる花の、木かけより、花鳥のほかにも、春のありかほに、露をわけて、さしのほる、おほろ月夜に、しく物そなきと、なかめ給ひし、いにしへの御けはひも、かくやと、おもひしられたり (306「鼠の草子」室町末絵巻)

此はちかつきの、ふせいを、よくよく、物にたとふれば、やうはいたうりの、花のもと、くもまの月の、さしそひて、きさらき半ばの、いと柳、風にみたるる、よそほひ、まかきのうちの、なてしこの、つゆをもけなる、ふせいして (311「鉢かづき」江戸初期写本)

としのほと、十四五はかりに、おほえて、あひきやうつきて、すかたをみれば、はるの花の、さきみたれて、いろかもともに、にほひわたるに、ことならず、かたちは、あきの月の、山のはを、ほのかにいつる、心ちして、ゑにかくとも、ふてにも、をよばす (358「ぶんしやう」慶長元和頃奈良絵本)

三十二さう御かたち、はなやかなり、たとへは、八えさくらの、ゆふはへに、にほひをさそふ、松のかせ、やなきのいとに、むすほほれ、つゆにぬれたるけしき、

117 (20) 花鳥風月を以てする美人描写

美意識を以てたとえているが、他作品にはこのような例は見えないし、これらの影響をうけたと思われる例も見当たらない。

次に急に減少する九文節以上二十文節以下の例に注目してみる。この約半数は「平家花揃」の二本からの採集である。

土御門大納言國綱女，しけひらのうへ

秋のさかりに，わさとうへられたる，御まへの，せんさいの中に，色うつくしき，こはき，露は，弓はりににたる，三ヶ月のかけに，玉かと見えて，かりかねさへ，をとつれたる，けしきとなん申さん(360)

少将たかふさ

ゆへある庭のおもに，わさと，つくろひうへられたる，きんたいの，さかりに咲て，色もかさなりて，ことに花花と見えたと，申たくそ(361)

右の例は途中で切ることもできず、時や場を風情あるものに設定し、複数の花鳥風月を配して、全体の醸し出す雰囲気を対象となる人物に見立てたものである。このような方法は、山口氏によれば『源氏物語』の生み出したものであり<sup>9)</sup>、上の例はその方法を踏まえつつ、さらに磨きをかけたものである。「平家花揃」は先に述べたように、内容そのものが『平家物語』の登場人物を花に喩えるといった趣旨のものであるため、このような方法に力をいれたことは当然であろう。ただ、広義の御伽草子の中では、きわめて異例であり、多くの作品には上のような筆力はみられない。

なお、「平家花揃」以外にも長い表現が見られる。その一つは「花づくし」である。

すかたをみれば，秋の月，春あをやきの，いとさくら，なつは，ほたんに，しやくやく，ききやう，かるかや，おみなへし(193「しみづ物語」寛永14写本)

きやうろさんのもも，きむこくしんのなし，けいようさんの柳，えんせうか，かきねのむめ，やうほうか，さくらも，これにはまさるへき(336「姫百合」江戸初期写本)

うそひめの，やとへゆきて，御すかたを見申に，さがや，よしのの，山さくら，さきものこらす，ちりもせず，たちた，はつせの，もみちはの，はつあさ(き)なりし，ふせいよりも，たへなるすかたを，見まいらせ候(343「ふくろうのそうし」明暦4写本)

そのよこふゑかすかたを，物によくよく，たとふれば，きんこくゑんの，山さくら，きやうかさんの，こうもも，かしようけのもみち，おんこのふしの花，けんほんのなしのくゑたるを，そむくにことならず(406「横笛草子」室町後期写本)



採集例の多くは個性的なものがきわめて少ない。例をあげれば、「花」が54例、「翡翠」が43例、「雪」が38例、「丹花」が24例、「芙蓉」が18例、「蘭麝」が17例で、以上だけで一文節の約七割をしめてしまう。つまり、素材がかなり類型化しているといえよう。

「花」は多く「桜」を意味すると想像される<sup>8)</sup>が、具体的な花名は出てくることは少なく、「山吹」「花橘」「紅梅」「紅葉」「青柳」なども見えるが、むしろこれらは修飾をともなって用いられることの方が多い。唯一「平家花揃」の二本だけは、「せんのぼけ」「ゆきほうづき」「れんげつつじ」「ひとへさくら」「うのはな」「さくらぐさ」「するせん花」「忍ぶわすれ」「しろやへさうび」「しろつつじ」「からぼたん」等他作品に比喩としては見えない花に人物をたとえる例が目立つ。このような素材としての個性が他作品にはほとんど見えない。髪を「みるふさ」(=海松のふさ)にたとえる「秋夜長物語」(七伝本中六本)くらいであろうか。

なお、一文節に含まれる表現の多くは決まり文句が多く、「花の顔ばせ」「花の姿」「雪のはだえ」「丹花の唇」「芙蓉のまなじり」「蘭麝の匂い」「翡翠のかんざし」「月のかたち」「桂の眉(ずみ)」「桃李の装い」等、姿・顔・目・唇・髪・肌等、身体全体や体の一部を表す名詞に「○○の」がついた例は192例で、一文節の比喩全体の七割を占める。

さらに、二文節以上の語をみていくと、素材の類型化に加えて、言葉の結びつき方までが類型化していることがわかる。

特に目立つ「宛転たる双蛾」「秋の蟬の羽」「柳の風に靡く」「女郎花の露おもげなる」「月山の端を出る」「花にねたまれ、月にそねまれ」「姿を申せば春の花、形を申せば秋の月」(以上は後に詳説)以外にも、いくつも見いだすことができる。複数の作品にまたがるものをいくつかあげれば、

秋の月・春の花・太液の芙蓉・都の花・梅と桜・未央の柳・蓮を含める唇・しぼめる花・つぼめる花・遠山の色・花の色・花をかざる・花の匂ひさきまさる・海棠の眠れる花・手の上の蓮花・桃顔露を含む・梨花雨を帯びる・露を含む花・遠山の花・梅と桜と柳・芙蓉の暁の波に浮かべる・夕陽の霧の間の弓張月・鶯の羽風になびく・露を含める糸萩・花の上行く月……

以上のほかにも、言葉の結びつきというより、「霞」と「桜」というように組み合わせが類似している例も多い。

一方、この類型化の傾向に明らかに反するのが、やはり、「平家花揃」である。「岩に、白躑躅」「紫竹に雪」「石に生いたる忘れ草」等と人物を、独特の

## 119(18) 花鳥風月を以てする美人描写

や「光る・輝く・玉」と比べると、武家小説・異類小説に「花鳥風月」の類が多いといえる。特に、武家小説において、「美人例示」が他の分類に比べて多かったこと、「光る」や「輝く」より「玉」を用いる傾向があったことと、合わせて考えれば、武家小説では、より即物的な描写を好む傾向があるのではなかろうか。

ただ、花鳥風月の表現といっても、今回の採集例はその範囲はかなり広い。そこで、さらに個々の表現を掘り下げ、さらに分類や作品との関わりをみていく必要がある。

### 四 花鳥風月の表現の長さ

これらの表現を文節数<sup>7)</sup>で示し分類したものが表3である。

花鳥風月の表現のうち、約半数は二文節以下の単純なものが多いことがわかる。できるだけ、「切る」方針をとっているため、当然の結果かもしれないが、全体の約八割が、四文節以下である。五文節になると急に数が減少し、九文節以上になるとさらに減少する。二十文節以上の長い例もあるがわずかで、この多くは「平家花揃」の二伝本が大半を占める。

まず、最も単純な一文節の表現に注目したい。喩えるものをずばりと言い表した最も単純な表現ゆえに、比喩の「素材」で個性が出ると考えられるが、

表3

文節類	用例				
		12	7	24	4
1	275	13	5	25	1
2	100	14	3	26	0
3	131	15	2	27	0
4	113	16	3	28	0
5	24	17	0	29	0
6	28	18	1	30	1
7	20	19	1	31	0
8	35	20	2	32	1
9	7	21	0	33	0
10	4	22	2	34	2
11	7	23	4	35	2

「光輝」のみが見られるもの…58 編

「花鳥」のみが見られるもの…66 編

「美人」「光輝」「花鳥」のどれも見られないもの…161 編

「美人例示」は単独で用いられることは少なく、多くは「光る・輝く・玉」や「花鳥風月」と共用される。一方、「光る・輝く・玉」や「花鳥風月」については、三分の二は他の表現と共用されるが、三分の一は単独で用いられる。なお、三類すべて揃った作品も 32 見られる。

以上のことから、「美人例示」の表現は、その方法の成立時期はさておき、広義の御伽草子の中では、他の二類に比べて遅れて美人描写の地位を得たのではないかと思われる。一方、「光る・輝く・玉」と「花鳥風月」に関してはどちらの表現を選ぶかということに何らかの意味があるように思われる。これらはともに伝統的な美人描写である。山口仲美氏によれば『浜松中納言物語』と『夜の寝覚』の容姿容貌に関する比喩表現について比較した結果、前者は「光のイメージをつかった比喩」が多く、後者は「植物のイメージをつかった比喩」が多いという<sup>5)</sup>。氏はこの違いを「表現のみならず、文学の質の違いにも通じて行く両物語の重要な分岐点のように思われる」と述べておられる。この点については、稿を改めて考えていきたいと思う。

次に分類<sup>6)</sup>との関りを三類比較して考えてみよう。(表2・数字は本数)

表2

分類	全体	美人例示	光る・輝く・玉	花鳥風月
公家小説	78	21	44	50
僧侶小説	128	8	55	48
武家小説	75	18	26	40
庶民小説	35	8	13	13
異国小説	25	2	7	8
異類小説	72	11	12	22
その他	5	2	1	3
計	418	70	158	184

「花鳥風月」だけを見ると、比率からみればどの分類でも少なからず現れることがわかる。美人描写の中で作品の個性を超えた一般的な描写であることを意味しよう。中で、公家小説と武家小説に特に多い。さらに、「美人例示」

表1 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
411	羅生門	C	寛文頃絵巻		
412	るし長者	E	寛文～元禄奈良絵本		
413	六代	C	元禄頃奈良絵本	2	
414	六波羅地蔵物語	B	寛文期以後絵巻		
415	わかくさ	A	寛文前後奈良絵本		光輝
416	わかくさ物語	A	寛文7年刊本		光輝
417	わかくさ	A	寛文頃写本	5	光輝
418	若みどり	D	寛文～元禄絵巻		

同じ作品であっても伝本が異なれば、用例がないこともある。たとえば、「一本菊」について、万治三年刊本には用例が少なからず見えるのに対して、慶長写本には全く見えない。「文正草子」五伝本のうち、江戸前期写本(359)にも全く見えない。この二作品に限っていえば、筋の上で異本同士の違いは多くはない。これらの表現の出現が必ずしも内容によるものでないことがわかる。

また、特に用例数が多い作品がある。「平家花揃」の二伝本(360・361)、これらの合計数は全体の約13%も占める。この作品は『平家物語』の登場人物を花にたとえるという趣旨の作品であるためである。418作品の中では特異な存在といってよい。これら以外には「十二人ひめ」(197)や「花子ものぐるひ」(316)も用例数が多い。以上四本は共に江戸期の伝本ではあるが、このような作品がみえることは美人を花鳥風月にたとえるという用法がかなり流行したことを意味するのではなかろうか。

表1にも「参考」として「美人例示」(表中「美人」)や「光る・輝く・玉の類」(表中「光輝」)があるかどうかを示したが、改めて「美人例示」(70編)「光る・輝く・玉の類」(158編)、「花鳥風月の類」(184編)の重なり具合を示すと次のようになる。

「美人」「光輝」「花鳥」すべてが見られるもの…31編

「美人」「光輝」のみが見られるもの…37編

「美人」「花鳥」のみが見られるもの…55編

「光輝」「花鳥」のみが見られるもの…94編

「美人」のみが見られるもの…9編

表1 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
379	松ヶ枝姫物語	D	寛文～元禄絵巻		
380	松風むらさめ	A	万治2年刊本	2	美人
381	松姫物語	A	大永6年絵巻	1	
382	松帆物語	B	正保・慶安頃刊本	2	光輝
383	松虫鈴虫讃嘆文	B	室町末写本	5	
384	窓の教	A	江戸後期写本	2	
385	まんじゆのまへ	C	寛文13年刊本	2	光輝
386	みしま	B	寛文～元禄奈良絵本		光輝
387	みしま	B	室町末写本		光輝
388	みなつる	C	寛永頃奈良絵本		
389	源蔵人物語	B	室町末写本		美人
390	源蔵人物語	B	文化13年以後写本		光輝
391	虫妹背物語	F	享保2年絵巻		光輝
392	無明法性合戦状	F	大永7年写本		
393	むらくも	F	寛文～元禄奈良絵本		
394	むらまつの物かたり	C	寛永頃写本		光輝
395	村松物語	C	寛文～元禄奈良絵本	4	美人・光輝
396	目連の草子	E	享禄4年写本		
397	物くさ太郎	D	寛永頃刊本	4	光輝
398	紅葉合	F	江戸初期写本	2	美人・光輝
399	もろかど物語	C	江戸中期写本		光輝
400	もろかど物語	C	寛永6年写本	5	光輝
401	文殊姫	B	近世奈良絵本	5	光輝
402	弥兵衛鼠	F	寛文頃絵巻		美人
403	雪女	C	寛文5年刊本	2	光輝
404	ゆや物がたり	C	寛文頃松会刊本		
405	横座房物語	B	江戸後期写本		光輝
406	横笛草紙	C	室町後期絵巻	2	美人
407	横笛物語	C	室町末写本	3	美人
408	横笛滝口の草紙	C	近世丹緑本	3	美人
409	よしのぶ	C	寛永～寛文奈良絵本		
410	頼朝	C	寛文～元禄奈良絵本	1	

## 123 (14) 花鳥風月を以てする美人描写

表1 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
347	富士の人穴草子	E	寛永4年丹緑本		
348	藤ぶくろ	F	室町末絵巻		光輝
349	藤袋草紙	F	室町末絵巻		
350	伏屋の物がたり	A	室町末写本	5	美人・光輝
351	二荒山縁起	B	近世写本		
352	佛鬼軍	F	元禄刊本		
353	舟のゐとく	G	近世絵巻		
354	不老不死	E	寛文～元禄絵巻		光輝
355	文正草子	D	寛永前後奈良絵本	7	美人・光輝
356	文正の草子	D	寛永頃丹緑本	6	美人・光輝
357	文正草子	D	慶長元和頃奈良絵本	3	美人・光輝
358	ぶんしやう	D	慶長元和頃奈良絵本	2	美人・光輝
359	文正草子	D	江戸前期写本		美人・光輝
360	平家花ぞろへ	C	江戸中期写本	46	
361	平家花揃	C	貞享3年刊本	59	
362	弁慶物語	C	元和寛永頃古活字本		
363	弁慶物語	C	元和7年写本		
364	弁の草紙	B	元禄8年本転写本	2	光輝
365	判官みやこはなし	C	寛文10年刊本		美人
366	宝月童子	E	寛文頃奈良絵本	5	美人・光輝
367	法蔵比丘	B	近世奈良絵本	4	
368	宝満長者	E	寛文5年刊本		
369	ほうまん長者	E	寛文頃奈良絵本		
370	法妙童子	E	寛文8年刊本	1	光輝
371	蓬萊物語	E	寛文～元禄絵巻	4	
372	蓬萊山由来	E	寛文4年刊本	3	
373	布袋物語	B	寛文～元禄絵巻		
374	堀江物語	C	近世写本	8	美人・光輝
375	堀江物語	C	寛文7年刊本	5	美人・光輝
376	ぼろぼろのさうし	B	寛永～正保刊本		
377	梵天國	B	近世絵巻		光輝
378	ぼん天こく	B	寛文頃写本		光輝

表1 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
316	花子ものぐるひ	G	寛文延宝刊本	18	美人・光輝
317	花つくし	F	正保3年刊本	1	
318	花の縁物語	B	寛文6年刊本	2	
319	花みつ	B	寛文～元禄奈良絵本	1	光輝
320	花みつ月みつ	B	江戸中期写本		
321	花世の姫	A	明暦頃刊本	2	光輝
322	はにふの物語	A	明応6年転写本	5	美人・光輝
323	はまぐり	F	近世奈良絵本	4	光輝
324	はまぐりはたおりひ め	F	明暦刊本	1	光輝
325	はもち	C	近世奈良絵本	1	美人・光輝
326	はもち中納言	C	近世写本	1	光輝
327	火おけのさうし	D	寛永頃丹緑本	1	
328	彦火々出見尊絵	E	江戸初期模写絵巻		光輝
329	びしやもん	B	寛永頃奈良絵本		光輝
330	びしやもん	B	江戸前期写本	1	光輝
331	毘沙門天王之本地	B	承応3年刊本	1	光輝
332	美人くらべ	A	万治2年刊本	2	
333	日高川	B	慶長頃奈良絵本		
334	一もときく	A	慶長写本		
335	一本菊	A	万治3年刊本	9	光輝
336	姫百合	F	江戸初期写本	7	美人
337	ひめゆり	F	寛文延宝松会刊本	6	美人
338	百万ものがたり	G	万治3年刊本	1	
339	兵部卿物語	A	江戸後期写本		光輝
340	福富草紙	D	室町絵巻		
341	福富物語	D	江戸初期絵巻		
342	ふくろふ	F	江戸初期奈良絵本	1	美人
343	ふくろうのそうし	F	明暦4年写本	6	美人
344	武家繁盛	C	寛文～元禄絵巻		光輝
345	富士山の本地	B	延宝8年刊本	2	光輝
346	富士の人穴の草子	E	慶長8年写本	1	

## 125 (12) 花鳥風月を以てする美人描写

表1 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
284	鶴の草子	F	寛文2年刊本	8	光輝
285	てこくま物語	C	永禄絵巻		
286	天狗の内裏	C	室町後期写本		
287	天狗の内裏	C	寛永11年写本		
288	天狗の内裏	C	江戸中期写本		
289	てんぐのだいら	C	寛永正保丹緑本	2	光輝
290	天照大神本地	B	元禄頃写本	2	
291	天神絵巻	B	室町末絵巻		
292	天神縁起	B	江戸前期絵巻		
293	天神本地	B	慶安元年絵巻		
294	天満天神縁起	B	康暦2年写本		
295	道成寺縁起	B	室町絵巻		
296	道成寺物語	B	万治3年刊本		
297	常盤の姥	D	室町奈良絵本	9	光輝
298	常盤物語	C	寛永8年写本	1	
299	鳥部山物語	B	近世写本	3	
300	長良の草子	D	寛永頃奈良絵本		
301	七くさの草子	D	寛文頃絵巻	2	
302	七草ひめ	A	近世奈良絵本	4	美人・光輝
303	ねこ物語	F	江戸中期写本	2	光輝
304	鼠草子	F	室町絵巻		
305	鼠の草子	F	室町絵巻		
306	鼠の草紙	F	室町末絵巻	3	
307	箱根権現縁起絵巻	B	室町絵巻		
308	箱根本地由来	B	江戸後期写本	2	光輝
309	橋姫物語	A	近世絵巻		
310	橋弁慶	C	近世奈良絵本	1	
311	鉢かづき	A	江戸初期写本	13	美人
312	鉢かづきの草子	A	寛永頃刊本	11	美人・光輝
313	八幡大菩薩御縁起	B	享禄4年絵巻		
314	八幡の御本地	B	承応2年刊本		
315	初瀬物語	B	江戸後期写本		



表1 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
253	たまむしのさうし	F	天正10年写本		光輝
254	玉虫の物かたり	F	室町後期卷子本		
255	玉虫の草子	F	寛永頃刊本		
256	玉虫草子	F	近世中期絵巻		
257	玉藻前物語	C	文明2年写本	4	美人
258	玉藻の前	C	寛文頃奈良絵本	1	美人
259	玉藻の草子	C	承応2年刊本	8	美人・光輝
260	田村の草子	C	寛永古活字本	1	
261	為盛発心因縁集	B	天正11年写本		
262	為盛発心物語	B	江戸中期写本		
263	俵藤太草子	C	室町絵巻		
264	俵藤太物語	C	寛永頃刊本		美人・光輝
265	短冊の縁	G	江戸中期写本	8	美人
266	竹生島の本地	B	近世丹緑本		光輝
267	稚児今参り	B	江戸前期奈良絵本	1	光輝
268	中将姫	A	慶長前後絵巻	6	光輝
269	中将姫本地	A	慶安4年刊本	3	
270	中書王物語	C	江戸前期写本	1	
271	鳥獣戯哥合物語	F	江戸後期写本		
272	調度歌合	F	近世写本		
273	長宝寺よみかへりの 草紙	E	永正10年写本		
274	月日の御本地	B	寛永正保丹緑本	1	光輝
275	つきみつのさうし	B	近世丹緑本	2	光輝
276	付喪神記	F	近世模写絵巻		
277	土ぐも	C	近世絵巻		
278	土蜘蛛草紙	C	室町絵巻	3	美人
279	つばめの草子	E	寛文頃絵巻		
280	つぼの碑	D	近世絵巻		
281	鶴亀の草子	D	寛文頃奈良絵本		
282	鶴亀松竹	D	近世奈良絵本		
283	鶴の翁	B	寛文以後写本		

## 127(10)花鳥風月を以てする美人描写

表1 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
221	雀の夕がほ	F	寛永～寛文絵巻		
222	硯わり	B	近世奈良絵本		
223	硯破	B	近世写本		
224	硯わり	B	近世奈良絵本		光輝
225	墨染桜	F	承応2年刊本	5	
226	住吉縁起	B	元禄写本		光輝
227	住吉物語	A	古活字本	1	光輝
228	諏訪の本地	B	江戸初期写本		
229	すはの本地	B	江戸初期写本		
230	諏訪草紙	B	弘化4年写本		
231	是害房絵	B	室町初期絵巻		
232	善界坊絵詞	B	寛文11年絵巻		
233	浅間御本地御由来記	B	安永2年写本		
234	善光寺如来本懐	B	応永9年写本		
235	善光寺如来本地	B	寛文6年写本		
236	善光寺本地	B	万治2年刊本		光輝
237	千じゅ女	A	室町末写本		美人
238	千手御前物語	A	近世初期奈良絵本		美人・光輝
239	千手女物語	A	江戸初期写本	1	美人・光輝
240	大悦物語	D	近世絵巻		
241	大佛供養物語	B	享禄4年写本		
242	大佛供養	B	江戸初期写本		
243	大佛の御縁起	E	室町末写本		
244	大佛之縁起	E	天和元年写本	1	光輝
245	宝くらべ	D	元禄奈良絵本		
246	滝口物語	B	江戸初期写本	6	美人
247	七夕の本地	F	江戸初期絵巻		
248	七夕物語	F	近世絵入写本		光輝
249	たなばたの本地	A	寛永7年写本	2	光輝
250	玉井の物語	E	近世写本		光輝
251	玉たすき	G	近世奈良絵本		
252	玉水物語	F	近世絵入写本		光輝

表1 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
189	じぞり弁慶	C	寛文頃奈良絵本		美人
190	しのぼずが池物語	B	寛文8年刊本	4	
191	しのびね物語	A	近世写本		光輝
192	しみづ吉高	C	慶長前後写本	4	
193	しみづ物語	C	寛永14年写本	5	
194	しみづ物語	C	寛永延宝頃刊本	3	
195	釈迦の本地	B	江戸初期写本	3	光輝
196	釈迦の本地	B	寛永20年刊本	9	
197	十二人ひめ	A	寛文10年刊本	20	美人・光輝
198	十二類絵巻	F	室町絵巻		
199	十人	A	近世中期写本		光輝
200	秀祐之物語	F	大永6年写本	1	美人
201	酒茶論	F	室町末期写本		
202	酒茶論	F	寛永頃刊本		
203	十本あふぎ	A	近世奈良絵本	1	
204	酒飯論	F	室町絵巻		
205	酒餅論	F	元禄刊本後印本		
206	精進魚類物語	F	寛永正保刊本	1	
207	精進魚類物語	F	近世中期写本	1	
208	浄瑠璃物語	C	室町末絵巻	1	光輝
209	浄瑠璃御前物語	C	慶長頃写本	11	美人・光輝
210	浄瑠璃十二段草子	C	慶長頃写本	3	美人
211	諸虫太平記	F	近世刊本		
212	神道由来の事	B	室町後期写本		
213	申陽侯絵巻	C	近世奈良絵巻		
214	すゑひろ物語	D	寛文～元禄絵巻		
215	鈴鹿の草子	C	室町後期写本		光輝
216	鈴鹿の物語	C	寛文～元禄写本		光輝
217	雀さうし	F	近世前期写本	4	美人・光輝
218	雀の発心	F	室町絵巻		
219	雀の発心	F	室町絵巻		
220	雀の発心	F	室町末絵巻		

## 129 ( 8 ) 花鳥風月を以てする美人描写

表1 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
158	金剛女の草子	B	江戸初期写本	2	
159	西行物語	A	永正6年写本		
160	西行物語	A	正保3年刊本		
161	西行の物かたり	A	江戸初期写本	6	
162	小枝の笛物語	C	江戸初期写本		
163	さがみ川	C	寛永6年写本		
164	嵯峨物語	B	近世中期写本	3	
165	さくらゐ物語	C	近世絵入複製本		光輝
166	桜梅草子	F	室町白描小型絵巻		
167	桜の中将物語	A	江戸初期写本	6	美人・光輝
168	さくらの中将	A	寛文10年刊本	2	光輝
169	酒の泉	D	近世絵巻	2	美人・光輝
170	さごろもの大将	A	室町末写本	3	
171	狭衣の中将	A	慶長2年写本	2	光輝
172	さごろも	A	寛永頃丹緑本	2	
173	さゝやき竹物語	B	近世絵巻		光輝
174	さゝやき竹	B	近世絵巻	4	光輝
175	さゞれ石	D	近世絵巻		
176	さよごろも付ゑんや 物語	C	寛文9年刊本	6	
177	さよひめのさうし	B	室町写本		光輝
178	さるげんじ	D	寛永正保丹緑本	2	光輝
179	山海相生物語	F	近世絵巻	2	
180	三人法師	B	寛永頃丹緑本	1	美人・光輝
181	塩竈宮の御本地	B	天保6年写本		光輝
182	志賀物語	A	寛文頃奈良絵本	1	光輝
183	しぐれ	A	永年17年写本	2	
184	しぐれ	A	正保慶安頃刊本	3	
185	しぐれ	A	寛永頃奈良絵本	7	光輝
186	四十二の物あらそひ	A	室町写本		
187	四十二の物あらそひ	A	古活字丹緑本		
188	四生の歌合	F	古活字丹緑本		

表1 続き

作品番号	作品名		年代・形態	採集例	参考
127	源海上人伝記	B	室町写本	2	光輝
128	賢学草子	B	室町絵巻	6	美人
129	源氏供養草子	A	室町卷子本		
130	源氏供養物語	A	室町末～江戸初期 絵巻	2	
131	還城楽物語	E	寛文13年本転写本		
132	幻夢物語	B	寛文8年写本	3	
133	小敦盛絵巻	C	室町末絵巻		
134	恋塚物語	B	明暦頃刊本	3	美人
135	庚申之縁起	B	天文9年写本		
136	かうしん之本地	B	慶長12年写本		
137	庚申縁起	B	天文9年写本		
138	庚申之御本地	B	承応頃刊本		
139	強盗鬼神	F	寛永頃丹緑本		
140	興福寺の由来物語	A	室町写本	1	光輝
141	弘法大師御本地	B	承応3年丹緑本		光輝
142	高野物語	B	近世写本	2	光輝
143	ごゑつ	E	近世奈良絵本	3	
144	こをとこのさうし	D	室町奈良絵本	1	光輝
145	小男の草子	D	慶長12年絵巻		美人
146	小男の草子	D	近世絵巻		
147	こほろぎ物語	F	近世中期写本		
148	小式部	A	近世写本	7	美人・光輝
149	胡蝶物語	F	近世中期写本	1	
150	小伏見物語	A	寛永頃奈良絵本	10	美人・光輝
151	小町歌あらそひ	A	万治3年刊本	1	
152	小町双紙	A	天文14年写本		美人
153	小町のさうし	A	寛永頃丹緑本	2	美人
154	小町物がたり	A	元禄頃刊本		
155	子やす物語	B	近世中期写本		光輝
156	子易物語	B	寛文刊本	1	
157	木幡狐	F	近世奈良絵本		美人

## 131(6) 花鳥風月を以てする美人描写

表1 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
95	かなわ	C	元禄頃奈良絵本		
96	神代小町	A	寛永頃絵巻	8	美人・光輝
97	賀茂之本地	B	承応頃刊本		光輝
98	唐糸草子	C	慶長元和古活字本	1	
99	唐崎物語	A	寛文頃写本	2	美人・光輝
100	雁の草子	F	慶長7年絵巻		
101	観音本地	B	慶長以前奈良絵本	3	
102	勸学院物語	F	寛文9年刊本		
103	祇王	C	元和寛永古活字本		
104	祇園牛頭天王御縁起	B	文明14年写本		
105	祇園牛頭天王縁起	B	長享2年写本		
106	祇園御本地	B	明暦頃刊本		
107	衣更着物語	A	貞享5年刊本	6	光輝
108	木曾よし高物語	C	慶長9年写本	4	
109	狐の草子	F	室町絵巻		美人
110	貴船の物語	B	室町写本	1	美人
111	貴船の本地	B	明暦頃丹緑本	1	美人
112	きまん國物語	E	享禄2年写本	4	美人
113	京太郎物語	A	近世写本		
114	きりぎりすの物語	F	室町卷子本		
115	くちきざくら	B	近世写本		光輝
116	愚痴中将	A	元和寛永写本		
117	熊野の本地の物語	B	慶長奈良絵本		光輝
118	熊野の本地	B	室町末絵巻		
119	熊野御本地	B	元和8年絵巻		
120	くまのゝ本地	B	寛永頃刊本	2	光輝
121	熊野の本地	B	寛文～元禄絵巻	1	光輝
122	車僧絵巻	B	近世奈良絵巻		
123	くるま僧	A	近世写本	2	
124	鶏鼠物語	F	近世奈良絵本		
125	獣太平記	F	寛文頃刊本		
126	月林草	F	近世写本	5	

表 1. 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
64	恵心先徳夢想之記	B	康正 3 年写本		
65	恵心僧都絵巻	B	応永 8 年模写絵巻		
66	恵心僧都	B	室町写本	2	光輝
67	恵心僧都物語	B	寛文 4 年刊本	2	美人・光輝
68	えびす大こくかつせん	F	万治頃刊本		
69	ゑんがく	F	近世奈良絵本		
70	役の行者	B	寛文頃奈良絵本		
71	ゑんま物語	F	明暦 4 年刊本		
72	大江山酒天童子	C	室町絵巻		光輝
73	大江山しゆてん童子	C	寛文以後卷子本	1	
74	大江山酒典童子	C	近世中期卷子本	2	
75	扇合物かたり	A	室町写本	5	光輝
76	扇ながし	A	延宝 7 年刊本	5	
77	大橋の中将	C	近世奈良絵本		光輝
78	おちくぼ	A	近世奈良絵本		光輝
79	おちくぼのさうし	A	万治刊本		光輝
80	御茶物かたり	F	寛永 7 年古活字本		
81	音なし草子	D	永禄 13 本模写絵巻	1	
82	大原御幸	C	慶長頃奈良絵本	1	
83	おもかげ物語	B	万治 3 年刊本		
84	おようのあま	B	近世奈良絵本		
85	御曹司島わたり	C	寛文頃絵巻	2	
86	戒言	B	永禄元年写本		光輝
87	蛙の草子	F	室町末江戸初期絵巻		
88	鏡男絵巻	D	近世絵巻		
89	かくれ里	E	寛文延宝頃絵巻		
90	かざしの姫	F	室町末期奈良絵本		美人・光輝
91	花情物語	F	近世写本	1	
92	花鳥風月	A	文禄 4 年奈良絵本	5	光輝
93	花鳥風月	A	慶長元和古活字本	5	光輝
94	花鳥風月の物かたり	F	近世初期影写本		

## 133 ( 4 ) 花鳥風月を以てする美人描写

表1 続き

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
33	鴉鷺物語	F	寛永古活字本	2	
34	伊香物語	D	近世写本		光輝
35	いけにえ物語	E	近世写本		光輝
36	いさよひ	B	近世奈良絵本		
37	石山物語	B	明暦4年刊本	6	光輝
38	いそざき	C	寛文頃奈良絵本	2	美人
39	一尼公さうし	D	近世奈良絵本		
40	巖島の本地	B	室町末写本	2	光輝
41	伊豆國奥野翁物語	B	天正15年写本		光輝
42	いづはこねの本地	B	寛天末頃刊本		
43	いづみしきぶ	A	近世丹緑本		
44	和泉式部	A	室町末卷子本		光輝
45	伊吹山酒典童子	C	近世奈良絵本		美人・光輝
46	伊吹山酒顛童子	C	近世絵巻		
47	伊吹山しゅてん童子	C	近世土佐絵本		
48	岩竹	C	近世奈良絵本		光輝
49	いわや物語	A	慶長13年写本	2	美人・光輝
50	岩屋の物語	A	室町末～江戸初期奈良絵本	5	光輝
51	魚太平記	F	寛文頃刊本		
52	有善女物語	B	室町後期写本		
53	うそひめ	F	慶安元年写本		
54	うたゝねの草子	A	近世写本	2	光輝
55	うばかは	A	近世奈良絵本		光輝
56	梅津長者	D	近世模本絵巻		
57	梅津乃長者	D	近世初期絵巻		
58	梅津の長者	D	近世奈良絵本		
59	浦風	B	近世奈良絵本		光輝
60	うらしま	E	室町中期絵巻		
61	うらしま	E	室町末期絵巻		
62	うらしま	E	近世初期奈良絵巻		
63	瓜子姫物語	D	近世初期絵巻	2	美人・光輝



表 1

作品番号	作品名	分類	年代・形態	採集例	参考
1	あいそめ川	B	寛文頃刊本	5	
2	青葉の笛	A	室町末写本	4	光輝
3	青葉のふえ	A	寛文7年刊本	3	光輝
4	赤城の御本地	B	天保2年写本		光輝
5	あかしの三郎	C	天文23年写本		光輝
6	あかし	C	寛永頃刊本		
7	赤松五郎物語	A	大永6年写本		
8	秋月物語	A	江戸初期写本	9	美人
9	秋夜長物語	B	永和3年写本	11	光輝
10	秋夜長物語	B	室町絵巻	11	光輝
11	秋夜長物語	B	文禄5年写本	11	光輝
12	秋夜長物語	B	天文9年写本	11	光輝
13	秋夜長物語	B	室町末絵巻	11	光輝
14	秋夜長物語	B	古活字本	11	光輝
15	秋夜長物語	B	古活字本	11	光輝
16	あきみち	C	近世奈良絵本	2	光輝
17	阿漕の草子	A	明德2年本転写本		
18	朝顔のつゆ	A	室町末写本	2	美人
19	あしひき	B	室町絵巻		
20	あしやのさうし	D	近世写本		光輝
21	愛宕地蔵物語	B	室町写本		光輝
22	愛宕地蔵之物語	B	承応2年刊本		光輝
23	熱田の神秘	B	室町写本		
24	あま物語	A	近世初期奈良絵本		光輝
25	雨やどり	A	近世奈良絵本		美人・光輝
26	あみだの本地物語	B	天文21年写本	2	
27	あみだの本地	B	室町末写本		光輝
28	天稚彦草子	F	室町模本絵巻		
29	雨若みこ	A	寛永頃写本		光輝
30	あやめのまへ	C	慶長頃小型絵巻	1	
31	蟻通明神のえんぎ	B	近世奈良絵本		
32	鴉鷺記	F	文禄3年写本	2	

## 二 採集の範囲と採集の方法

最初に断ったように、花鳥風月を用いた美人描写といっても様々あるが、ここでは単純なものから複雑なものまで、すべてを対象とする。単純なものとして、すでに決まり文句としての意識が強く、比喩の意識は希薄かと思われる「翡翠のかんざし」や「丹花の唇」をも範囲に含めることにする。

次に、採集した用例の数を問題にする場合、長い描写をどこで切るかという問題が出てくる。類型性を探るという方針をもとに、おおむね切り方をつぎのように定めた。

- 1 「翡翠のかんざし」のような決まり文句は一つとして数える。
- 2 姿・顔・髪・肌というように視点が変っている場合はそこで切った。
- 3 同じ「姿」に視点があっても、別の視点でそれをたとえるという意識が働いている場合、たとえば、次のような例の場合は切った。

世にならひなく、いつくしく、①やうばい、たうりの、風になびき、②をみなへしの、露おもけなるよりも、なをあはれなる、さましたり (355「文正草子」)

- 4 「花づくし」のように、あきらかに並列する効果をねらっているものは切らなかった。

そのよこふゑかすかたを、物によくよく、たとふれは、きんこくゑんの、山さくら、きやうかさんの、こうもも、かしようけのもみち、おんこのふしの花、けんほんのなしのくゑたるを、そむくにことならず (406「横笛草子」)

- 5 様々な花鳥風月を組み合わせ一つのもまとまった世界を作り上げているものは、切らなかった。

名にたかき、春のあけほの、かすみのなかに、月かすかにのこりて、山きは、しらみわたれるに、あたりまで、かほり返たる、かは桜の、ふきよるかせも、うしろめて(た)きに、やや、うちちるほと、おほふはかりの、袖もかなと、あちきなく、おほゆるほととや、きこへん (360「平家花揃」)

## 三 作品と用例

以上のように、採集した例は184編(780例)である。これは418編の44.0%を占める。「美人例示」が全体の16.7%<sup>3)</sup>、「光る・輝く・玉の類」が37.8%<sup>4)</sup>であったことと比すれば、広義の御伽草子の中では、美人描写の際、この三類のうち「花鳥風月」の表現が最も一般的であるといえる。

「花鳥風月」の表現について、418編のうち、どの伝本にどれだけ用例があるかを示したのが表1である。

# 花鳥風月を以てする美人描写

——御伽草子の場合

染 谷 裕 子

## 一 はじめに

「調布日本文化」7号及び8号<sup>1)</sup>に続き、今号でも、また御伽草子の美人描写について述べる。市古貞次氏の指摘された三つの方法<sup>2)</sup>、「光るといふ語を以てする」方法、「自然、月、花に喩へる」方法、「日本・外国その他の古往今来の美人に喩へる」方法のうち、本稿では最後に残った第二番目の表現について考察する。本稿では、これらを、花鳥風月の表現と呼ぶことにする。

さて、花鳥風月の表現といってもさまざまな形がある。単に、「花のごとし」のように、きわめて単純な比喩から、市古貞次氏があげておられる次のような複雑な例もある。

御曹子は御覧じて、この鉢かづきの風情を、ものによくよく譬ふれば、楊梅桃李の花の香に、雲間の月のさし出て、二月なかばの糸柳の風に乱るよそほひも、籬のうちの撫子の露重げに物よわく、はづかしげにそばみたる顔の愛敬のいつくしく、楊貴妃李夫人もいかでか、是にまさるべきと、不思議におぼしめしける。(「鉢かづき」)

右のような例こそが、御伽草子の美人描写の特徴の一つであることは確かであるが、これらが広義での御伽草子全体を覆っているものなのだろうか。また分類や成立年代と何らかの関わりがあるのだろうか。

そこで、本稿では、単純なものから、複雑なものまで花鳥風月の表現をすべて見渡して見て、改めて御伽草子における花鳥風月の表現の共通項を探っていきたい。そして、それらが、前代の文学作品や当代の文学作品の表現とどのような関わりがあるかにも、少なからずふれていこうと思う。

対象は、今回も「室町時代物語大成」十三巻（角川書店）の四一八伝本である。